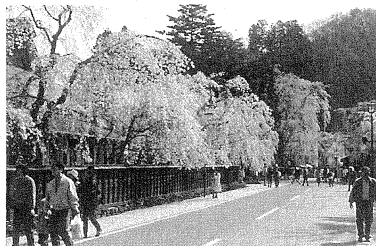




古城山からの俯瞰 角館の伝建地区はかが一望される



伝承館前のシダレザクラ



武家屋敷通りのシダレザクラ

するため、長い年月のさまざまな工事や車の影響、隣接樹木の日影により、年々生育環境の悪化が危惧されるようになりました。角館町教育委員会では、平成一一年度から一三年度に、文化庁、秋田県教育委員会の支援により「天然記念物角館のシダレザクラ」緊急調査事業、保存管理計画策定事業を実施しました。

調査の結果、シダレザクラの樹高は、指定申請当時の調査（昭和四八年度）に比較し平均一mほど低く、胸高直径は日当たりの良い場所ほど大きな生長が見られました。樹高は逆に日当たり良い場所ほど低く枝が張り樹形が良く、日当たりが遮られるほど肥大生長が抑えられ、樹高が高く枝張りが悪いことがデータ的に明らかになりました。また、開花状況は日当たりが良いほど花の量が多く、枝のシダ

レ具合が良く、開花時期が早いという傾向が見られました。

一部高木に日当たりを遮られて衰退したシダレザクラがあるものの、九〇%以上が治療を要するが、概ね健全と判断されました。角館のシダレザクラは、一本一本がそれぞれ異なった生育環境の中にあるのが特徴です。

平成一四年度から六か年計画で、シダレザクラにもっと元気になってもらおうと策定された保存管理計画に基づいて、保存修理工事を実施しています。保存修理委員会を組織し、保存修理内容を協議・検討しつつ、具体的には、根まわりを栄養分のある改良土に入替える「土壌改良」や土の中に構造物による空間を設け根の伸長を図る「根系誘導工」、根の上に盛られた土を除去する「盛土除去」、人が立入り根

を踏まないよう「保護柵の設置」、日当たりを確保する「隣接木の剪定」等、生育している環境により組み合わせる保存修理工事を行っています。

また、多数の観客の方々が良い花を見ていただくため、日常の管理も不可欠です。本来は、落枝、落葉が自然分解して樹木に栄養分を供給するのですが、人為的に植栽されたシダレザクラは、清掃により有機物の供給が断たれ、養分不足のため毎年継続的な施肥は欠かせません。日当たりの悪い下枝や病虫害での枯枝や、枝に雪が載った雪折れ等、自然災害による枯枝や枝折れがあります。このような枝を除去して良い花を見ていただきたいと思い、ついつい管理作業に力が入ってしましますが、「サクラは手を尽くした分応えてくれる」ので苦労があってもやり甲斐があります。

【角館町角館伝統的建造物群保存地区】には年間約二五五万人の観光客が訪れ、文化財の公開として全国でも大きな効果をあげていると思います。文化財を遺してくださった先人たちの偉業に感謝するとともに、伝建地区や角館のシダレザクラ、また隣接している国名勝檜木内川堤（サクラ）等の文化財をこの後ご支援ご指導をいただきながら大切に護って、何回となく角館を訪れてくださる多くの方に満喫していただきたいと思っています。

（角館町教育委員会文化財課 黒坂 登）

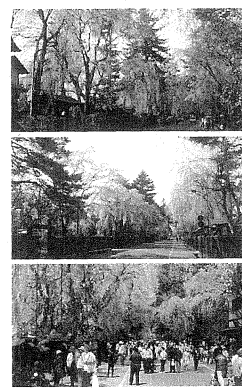
秋田県角館町

樹木医からみる
伝建地区とシダレザクラ

角館町は、秋田県の中央内陸部、仙北平野の北側に位置し、人口は約一万五〇〇〇人弱の町です。町には元和六年（一六二〇）にま

の建造物群に、四季折々の歴史景観を見せてくれます。

一m近い積雪と鉛色の空に閉じ込められた冬から開放された喜びのように、シダレザクラの花は滝のごとく開花します。一斉に下を向いて咲く特徴があり、ちょうど桜花に見つめられるような錯覚に陥ります。このサクラは決して珍しい樹種ではなく、全国いたるところに見られますが、武家屋敷と一体となったときの美観は「市街地内に古くから受け継がれたシダレザクラの群として他に類例を見ないものである」（指定通知書より抜粋）として昭和四



伝建地区のシダレザクラ

九年国の天然記念物に指定されました。

角館の武家屋敷は元和六年に菅名義勝公によって、この地に新しく町づくりされました。基本的な町割・屋敷割や城郭形態の桁形がそのまま残っており、貴重な町並みとされています。菅名公は後継ぎの不慮の事故により五一年間で断絶してしまいました。その後を継いで、明暦二年（一六五六）に入部した佐竹北家角館初代義隆公は、京都の公卿高倉永慶の次子で、秋田藩主佐竹義宣公の養子に迎えられた後、角館の初代所預りとなりました。義隆公の子義明公（角館二代）の夫人も京都公卿三条西家の生まれで、二代続いて京都育ちの方を北家に迎えていることから、当然、京文化の移入が盛んであり、はるか雅やかな京を偲ぶもの一つに、シダレザクラもあつたことと思います。その種子が苗木を持ち帰って殖やされたのが角館のシダレザクラの始まりとされ、やがて殖やされ、家臣の屋敷に植えられたと伝えられています。

その後の、明治三三年（一九〇〇）には、町人町から武家屋敷までおよぶ大火があつて、かなりのシダレザクラが焼失した記録があります。しかし、代々武家屋敷の子孫が受け継ぎ、大切に護り、殖やされたおかげで、花期には町内外から訪れる一三〇万人以上の観客客に鑑賞いただいています。

シダレザクラの植栽地は屋敷内や県道に面



夏の町中ノ町並み



初夏の御蔵道

た。山車の後ろに吊るす見送り幕も新調され、完成したばかりの山車に載って、お囃子を奏でる子どもたちを見ると心が和みます。山車の曳き手はもちろん住民で、老いも若きも笑顔がこぼれます。

夜は各家の門口に提灯の灯りが点り、一層情緒ある町並みが見られます。

蝉時雨が耳に心地よい夏、子どもたちは前川に手足をつけて遊びます。

夏の風物詩である盆踊りも大好きな行事のひとつです。夕暮れ時、唄や音頭が聴こえて

くると、いてもたってもいられません。

江州音頭が変化したと思われる『熊川音頭』は、誰もがよく知っていて昔から踊られてきました。近所でも、にわか盆踊りが開かれたりします。

京都の「一乗寺郷土芸能保存会」のご指導で約八〇年ぶりに復活した『てっせん踊り』は、鳴り物を一切使わない厳かでゆったりとした唄と踊りです。昔、京都から鯖街道をたどって熊川にも伝わり、大正時代まで踊られていたそうです。永年の時を超えて、今、この熊川宿に見事に蘇ったのです。

また、熊川では日頃「ごめんやす」「おいでやす」といった京言葉を使います。のんびりしていてやさしさが感じられます。

若狭から京の都へ物資が運ばれたように、都からは言葉や文化が伝わったのです。そしてそれらが熊川古来の伝統と融和し、大切に守り継がれて今日の熊川宿があるのだなと思います。

さらに現在、「みんながよくなるまちづくり」をコンセプトに、住まいや暮らしを犠牲にしない住民主体のまちづくりが進められています。

こんな自然が豊かで歴史的な熊川宿、まちづくりで元気を取りもどした熊川宿を、私は今、全国に発信しています。

私がホームページを始めたのは、熊川宿が重伝建地区に選定されて日もまだ浅い平成九年の春でした。以来、熊川宿の近況や見どころ、風景写真などを掲載して七年、今では多い時はひと月に約七〇〇件のアクセスがあります。ホームページから散策マップをプリントして、遠くは北海道から来られた方もいます。

また平成一三年度より「若狭熊川宿まちづくり特別委員会」に入らさせていただきました。町並みに一層興味を持てるようになりました。兄とともに熊川宿の広報紙「町並み通信」の編集にも携わらせていただいています。

熊川宿の家々が仲良く建ち並んでいるように、みんながともに仲良く、趣味や特技を活かし楽しみながらまちづくりが行われ、ますます魅力ある熊川宿になっていくよう願っています。

(若狭熊川宿まちづくり特別委員会委員 松見正幸)

初夏の熊川宿

心やすらぐ住空間のなかで

日曜日の昼下がり、観光客に混じってカメラを掲げて歩いていると、店先のおばちゃん声が掛けて下さいます。

「ええのが撮れますかあ？」

「なかなか気に入ったのが撮れせんわあ」

望みがいいのか、腕が悪いのか……。

澄みきった青空に緑豊かな山々、セピア調の町並み、白壁の土蔵。被写体は素晴らしいのになかなか思うように撮れません。

ここは鯖街道熊川宿。かつて若狭小浜から京の都へ鯖をはじめとする多くの海産物や物資が運ばれた宿場町です。

町並み保存の話がもち上がったのが、過疎化が進んでいた昭和五〇年頃ですからかれこれ三〇年になろうとしています。

当時は「こんな田舎町が本当に良くなるのだろうか？」どんな町並みになるのだろうか？「観光客は来てくれるのだろうか？」といった不安や疑問がありました。



山車を曳く人々

祭り囃子を奏でる子どもたち



曳き山車巡行

熊川宿納涼盆踊り

そして時は流れて、多くの先人たちが関係者の多大なご努力により、町並みの整備が始まりました。

平成八年には国の「重要伝統的建造物群保存地区」に選定されました。また建設省「歴史国道」の選定、国土庁「水の郷百選」の認定も受け、この頃より急速に町並みの整備や

家屋の修景が進みました。

中ノ条橋が架け替わり、中ノ町からは電柱や電線がなくなりました。広くひらけた街道は、私たちが子どもの頃から見慣れていた熊川とは違ったどこか別の町に変わったような、新鮮でいて懐かしい、そんな気がしました。

観光客の方々も「静かで落ち着きますね」「時間がゆっくり流れている感じがします」と言っています。

手前味噌かも知れませんが、穏やかで居心地のいい、こんな熊川宿がとても愛おしく思えるのです。

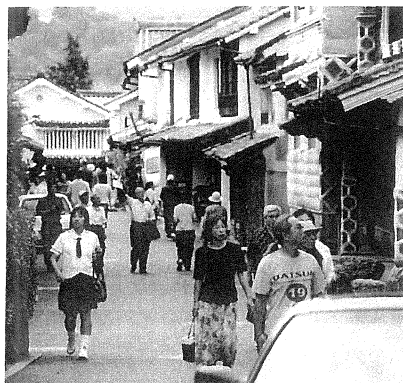
熊川宿には四季それぞれの季節ならではの風景がありますが、山や町並みの木々が新緑であふれる初夏が私はいちばん好きです。

白石神社の祭礼が行われる五月三日は子ども頃からとても楽しみな一日でした。

その日は、朝、親から小遣いをもらい神社へ急ぎました。肝心のお参りもそこそこの実は露店へ行くのが目的だったのです。おもちゃや爆竹などを買って遊びに夢中でした。

お神輿や祭り囃子は過疎化と少子化の影響で、一時途絶えかけた時期もありましたが、近年「熊川宿伝統芸能保存会」が中心となって子どもたちに受け継がれようとしています。

かつて祭り囃子を載せて区内を巡行したといわれる山車が約四〇年ぶりに復元されました。



観光客でにぎわう現在の八日市地区

変革する町並保存会
その中心となるのが八日市護国地区町並保存会です。これまでどちらかといえば親睦会的

ルク市から前都市建設局長のミヒヤエル・セベリーニ氏が来町され、町並保存センターで小さな講演会を催しました。その際に私は「あなたのような熟練した行政マンが退職して、あとは大丈夫か」と質問しました。これに対して彼は「後任者は、私の下です。二〇〇年以上の経験が積んでいるのでまったく問題ない」と答えましたが、このような関係は日本では考えられないことです。多くの場合、自治体の担当者は数年で異動し、そのたびにそれまで培った経験や人間関係は一度リセットされます。これでは、運動の積み重ねは困難です。これを補完するためには、住民自らが運動を構築していくことが不可欠です。

二〇〇四年四月〜一〇月まで、内子町、大洲市、西予市をメイン会場に愛媛県が主催する「えひめ町並博二〇〇四」という催しが開催されます。その目的は歴史的遺産や伝統行事の宝庫である愛媛県南予地方の魅力を全国に発信し観光客の誘致を図ることですが、特に新たなものは建設せず、住民生活の場である町並を舞台とする点で注目されています。町並博のテーマである観光客の増加は、町並にとっては観光公害の増加にもつながる諸刃の剣とも言えます。しかし、内子を訪れる人が増えることは、まちの可能性を高めることも事

えひめ町並博二〇〇四

な要素が強かったこの会は、町並保存センターの設置を契機に、まちづくりを担える組織へと変革しつつあります。まず、世帯主中心だった会員制度を個人に改めました。これにより女性や若手の参画が可能になりました。それと同時に、地区住民を正会員、それ以外を賛助会員と位置づけ、地区住民が主体となることを明確化しました。さらに組織に町並保存対策部、観光部、広報部の専門部を設け、分野ごとに目的をもった活動する体制を整えました。また、住民アンケートを実施し、地域の課題を浮き彫りにしました。今後はそれらの解決に向けた活動をととして、地域をリードしていける組織になることを期待しています。

町並保存地区では現在、高齢化やそれに伴う空き家の増加が課題となっています。また、観光客の増加に伴い目立ってきた外部資本の進出も住民の利益を守る上で問題です。町並保存センターでは、これらの課題の解決に町並保存会と一緒に取り組んでいます。ヨーロッパのように一〇〇年、二〇〇年と持続する町並保存地区を目指して、次の世代につなげる活動をいま行いたいと思います。

(愛媛県内子町八日市・護国町並保存センター 畑野元一)

おわりに

実です。期間中は意欲のある元気な住民が、自主企画イベントという形でまちの新たな使い方に挑戦します。全国の皆さんのご来場を心よりお待ちしております。



ローテンブルク市庁舎



市庁舎内部の事務室



1970年代の八日市地区



町並保存会の防火訓練

愛媛県内子町

八日市・護国地区 持続する町並保存を目指して

ドイツ・ローテンブルク市

凸凹の石畳、煉瓦色の屋根瓦、窓辺を飾る季節の花々……。六月のローテンブルクは伝統の美しさにあふれています。中世の趣を残すこの小さな町には年間約二五〇万人の観光客が訪れます。伝統的な町並を残すという市民の努力が、多くの人々を惹きつけ、経済的な豊かさをもたらしているのです。一九九四年五月、私は町並保存が縁で交流が始まったこの町に派遣され、一年間滞在する機会に恵まれました。ここに暮らしてまず感じたのは、建物再生の見事さです。外観は伝統的な建物であるにもかかわらず、その内部は非常にモダンな造りになっていて驚きました。現代のライフスタイルにあった住空間がそこにはありました。次に驚いたのは規制の厳しさです。ローテンブルク市は、建築造形条例と広告物条例を保存の柱にしていますが、その厳しさは内子の保存条例の比ではありません。使用する材

料はもちろん、窓や扉の形状、寸法まで細かく規定してあります。それに反して、個人への補助金は内子ほど多くはありません。特に私が滞在していた当時は、東西ドイツ統一の影響で、修復にかかる国からの補助金はすべてカットされていました。それでも町並保存を続けるローテンブルク市の姿に、町を誇りに思う市民の心意気を感じました。

町並保存のもたらしたもの

一〇〇年以上の歴史をもつローテンブルク市には及びませんが、内子町八日市・護国地区で町並保存運動が始まって約三〇年が経過しました。かつて観光客など皆無に近かったこの町に、年間数十万人の人たちが訪れるようになり、保存地区の様相は大きく変わりました。今では愛媛県内有数の観光地に成長しています。

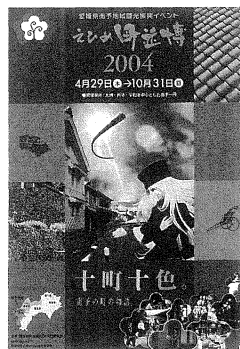
その一方で、観光客の増加は地区内の住環境を悪化させています。本来閑静な住宅地で

あった保存地区はにぎやかな観光地へと姿を変え、通行の支障やプライバシーの侵害などの問題も起こっています。暮らしと観光の両立は、全国の保存地区が抱えている問題ですが、八日市・護国地区でも避けては通れない課題になっています。

町並保存センターの設置

そういう状況の中で、平成二二年(二〇〇〇)一〇月、伝建地区に八日市・護国町並保存センターがオープンしました。江戸時代の民家を利用したこの施設は、町並保存対策係の出先機関であると同時に住民組織である町並保存会の事務所も兼ねています。事務所には保存会長のデスクもあり、保存地区に関する情報はダイレクトに保存会にも伝わります。情報を共有し、一緒に考えてもらうことによって、住民自らが地域をコントロールする力を身につけてもらいたいというのが背景にあります。

平成一三年(二〇〇一)四月、ローテン



えひめ町並博2004のポスター



上町から下町へ各町の若衆によって神事がはじまる 写真：三沢博昭

驚かされるのはその連続性である。宿場の南端・鎮神社から北端八幡神社まで、街道沿いには二一九戸の町家が並ぶ。通りに面した建具をとりはらって演出していた民家は一八八戸、じつに八六%におよぶ。これほど個々の家々のしつらいに共通性があり、また、これほどまでにしつらいが連続性をもっている祭りを見たことがない。

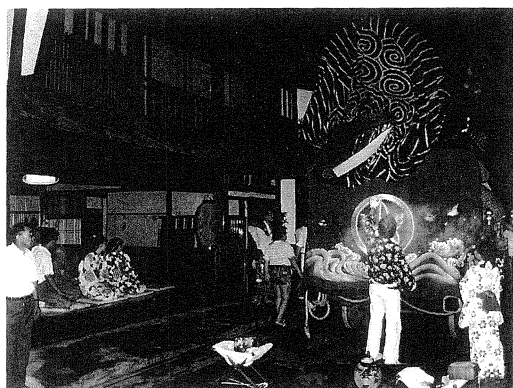
では、奈良井宿祭礼のしつらいは、全国各地の祭礼のなかで、どのように位置づけられるのだろうか。京都祇園祭など各地の都市祭礼では、格子のとりはずしがきき、建具を取り払って続き間として使うことができる伝統的町家の特徴を十分に生かしたしつらいが行われている。また滋賀県大津では、祭りのしつらいのために、開口部や床の間飾りなどしつらいが町家の意匠に影響していた。奈良井のしつらいは、町家の特徴をよく生かしたものであるといえるが、それ以上に注目したいのは、祭りのしつらいが町家・町並みの保存と継承に深くかかわっていることである。

アンケートによれば、町家を改築・新築するにあたって、祭りのしつらいを考慮した家が多いことがわかった。全国の伝建地区では、伝統的な民家を修理する際、どのように現代的な生活と整合性をとるのか、また、新しい建物を修景する場合、どのような間取りで、どのような表構えにするべきかが大きな課題である。奈良井の場合、祭りのしつらいというわかりやすい意識が、「奈良井の町家こうあるべき」という共通認識を下支えしているのである。

伝建地区の修理・修景事業は、この夏祭りによって大きく影響されています。住民は、祭りの前に工事が完了するか、あるいは祭りの後に着工するかどちらかを選択します。この祭りでは、街道に面したミセノマを開け放ち、一家あけて神様をお迎えするからです。

さらに、住民はしつらいという意識で、ハレの日に限って、自分の家の表構えや接客空間となるミセノマなどを眺め、家の空間的・意匠的特長を再認識するのです。このことは、年々の変化というものを許容しながらも、自らの町並みのありさまをいま一度考える契機となっています。保存という概念以上に、奈良井においては、このハレの日の景色が町家や町並みの継承に大きくかかわっているのです。この夏祭りを境に、木曾にはいち早く秋が到来します。奈良井の町並みは、夏祭りのにぎわいから、日ごとに静かな宿場町のたたずまいになっていくのです。

(檜川村町並み文化整備課長(学芸員) 渡邊 泰)
(奈良女子大学助教授 増井正哉)



家人はミセノマに正座し獅子屋台を迎える

長野県檜川村

ハレの日の 伝建地区の景色

山あいの静かな町並みも、毎年、八月十一・一二日の両日執り行われる奈良井鎮神社の例祭によって、大きく動の姿に変化します。

ここ長野県檜川村奈良井は、昭和五三年に国の重要伝統的建造物群保存地区に選定された近世の宿場町です。保存地区は、奈良井川に沿った中山道の宿場を中心として、南北約一km、東西二〇〇mの細長い範囲で、南端に鎮神社、北端に八幡神社、さらに町並みの背後の山裾に五か寺を配しています。

町家の表構えの特徴は、切妻造り、平入で、表二階部分が出梁によって前方にせり出していることや、大戸口や部が街道筋に向けて開口されていることなどです。間取りは、片側に表から裏に抜ける土間を取り、この土間に沿って街道側からミセノマ、カッテ、ナカノマ、ザシキ、さらに庭という配置になっています。

旧奈良井村の村社であり、経津主^{つぎぬす}神を祭神とした鎮神社の例祭は、この伝建地区を舞台に執り行われますが、住民は単にハレの日の

祭礼を氏子として執り行っているというだけでなく、この宿場内における祭りの独特な「雰囲気」を大切にしてきました。

この「雰囲気」として表現される祭りの姿を、学問的側面から調査・研究を行っていた奈良女子大学の増井正哉助教授に、その研究の一端を報告いただきましたので、次に掲げさせていただきます。

我が国の都市祭礼では、曳山や剣鉾などの宗教的シンボルが巡行する通りと、その両側に建ち並ぶ町家が美しくしつらえられ、そこにハレの空間が形づくられる。私たちは、祭礼時の町家・町並みの演出について、全国で調査を継続してきたが、奈良井宿鎮神社の祭礼で、個性的なしつらいが見られると聞きおよび、一昨年、昨年と調査をさせていただいた。全戸のしつらいの様子を図面にとり、またお住まいの方に、ヒアリングとアンケートを実施した。祭礼時に、奈良井の町並みは大きく変貌す



普段の奈良井宿(下町より鳥居峠を望む) 写真：三沢博昭

る。家々では、ミセノマ前面の建具をすべて取りはずす。軒先をかざるのは大きな吊提灯とすだれである。宿場町の長い通りに建ち並ぶ町家の軒下に、すだれが連続する様はとても美しい。そして、御神輿^{みみこし}が近づくとあたりの家々では、一斉にすだれを上げて御神輿を迎える。家人はミセノマに正座して御神輿を迎える。ミセノマ前面の建具はもちろん、奥のカッテの建具も取り払われて、通りとミセノマ、さらに町家の奥の室までが一体となった、祭礼の空間が形づくられるのである。



大浦天主堂から港を望む

存に対する認識を含め、長崎の地域活性化、地域振興に寄与することを目的としています。レトロな衣装を身に着けたパレード等、居留地時代をほうふさせるようなイベントが盛りだくさんです。

その中で、伝統的建造物群保存地区の町並み保存会の方々を中心に、「洋館で遊ぼう」を掲げ、この日はかりはたくさんの方に洋館に親しんでもらう催しを行います。南山手の洋館では、子どもたちの笑い声が聞こえます。庭の芝生には小動物コーナーが設けられ、ペンギンやウサギ、ヤギと子どもたちが戯れていま



東山手の洋風住宅で遊ぶ子どもたち

す。建物の中には、地域の幼稚園児や、小学生の作品がずらりと展示され、普段の洋館とは少し様子が違います。

東山手の洋風住宅群には、さまざまな国の人が集っています。七棟のうちC棟は、通常「地球館」という国際交流の拠点として活用しています。毎日、各国の留学生が自国の料理を創ってランチサービスをしています。今日は、「ワールドフーズレストラン」として大にぎわいです。この二階では、「居留地チエス大会」が行われ、この日のために練習した選手たちの戦いが始まっています。隣の広場では、バグパイプの生演奏が流れています。

和室があるA棟では、「異国体験写真館」を

開館しています。色々な国の民族衣装を着て写真に写れます。洋館の前でパチリ！思い出に残ることでしょう。B棟の東山手保存センターは、「竹細工体験館」に様がわり。ここでは、昔の伝承遊びが体験できます。子どもたちは、大喜びで遊び方を教わっています。文化財の建物がにぎわっているのを見るのは微笑ましい限りです。

この地区は、伝統的建造物群保存地区であると同時に、長崎市の観光地として最も重要な地区です。そのことで生じる問題も少なくありません。「保護と開発」「日常生活と観光」一見相反するこれらの問題は、長崎市の発展に避けて通れない課題です。文化財は壊してしまつたらもう元にはもどりません。せめてこれ以上、破壊が進まないように、お互いの立場を理解した上で、共存、共生できる役割を担っていきたいものです。長崎市や市民の使命でもある「文化財の継承」は、ここに住む人々が、この地を愛し、誇りをもつことで成り立っているといっても過言ではありません。この「長崎居留地まつり」に参加することで、人々が、地域について話し合い、見つめ直すきっかけとなれば幸いです。

今年は、九月二五日・二六日に開催します。皆さんも居留地時代にタイムトリップしてみませんか。

(教育委員会文化財課副主幹 原田宏子)

長崎県長崎市

文化財を守り育てるために 洋館で遊ぼう 「長崎居留地まつり」

長崎は、小高い山と海に囲まれ、湾が大きく陸地に入り込み、複雑な地形の中に町が発達しました。二〇〇余年の鎖国時代には、我が国唯一の貿易港として西洋の多くの文化が流入し、日本文化の近代化に大きく貢献しました。

さらに安政五年（一八五八）、幕府は、アメリカをはじめとする五か国と、修好通商条約を結び、翌年、横浜・函館とともに、長崎も新しい時代の自由貿易港として開港され、出島、唐人屋敷に限定されていた外国人の居住地は、東山手・南山手、大浦に拡大され、ここに居留地が形成されました。ここで再び、異国情緒豊かな文化、文物がたくさん入ってくるようになり、長崎の近代化は急速に進展することになります。

明治三二年（一八九九）に居留地は廃止されましたが、一〇〇余年経過した今日においても、幕末から明治にかけて建てられた洋風建物など長崎の近代化を証拠づける文化財や、

居留地時代の石畳・側溝・石垣・樹木等の遺構が数多く残っています。それがあまりにも多いために、長崎市や長崎市民にとって、その存在がごく普通のことであり、見る景色もごく普通の景色になっていて、あまり意識をしていないように思います。しかし、文化財の少ない地域で、その遺産を生かしたまちづくりにはげんでいる人も少なくありません。それを考えたときに、いままさながら、長崎の文化と歴史を生かし、これらの遺産を子孫に伝えていくこと、すなわち、「文化財を守り育てていくこと」が、私たちがしなければならないことだと考えます。

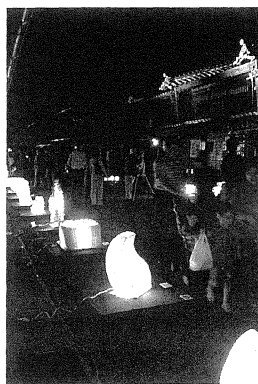
この地域も、時代の推移とともに、洋風建造物や当時の遺構は急速に姿を消し、一帯の景観は日に日に変貌していきつつあり、このまま放置すれば、面影を残すわずかな景観もやがては市街化の波に埋没する可能性があるかと、保存条例の制定に着手しました。そして、平成二年（一〇月、東山手・南山手は伝統的建



居留地パレード（旗隊）

造物群保存地区として指定、平成三年四月には国の重要伝統的建造物群保存地区の選定を受けました。その後、町並み保存会を中心に、まちづくりを進めてきました。地域の清掃活動や、講演会等を開催しています。保存の大切さを知ってもらうためには、より多くの方々にこの地の歴史的遺産の価値を知ってもらうことが第一歩だと思っています。

まだまだ残暑が厳しい九月の下旬、その啓発活動の一つとして、この旧居留地一帯で、「長崎居留地まつり」を開催します。このまつりは、旧外国人居留地の歴史的遺産を活かしながら、市民と行政が一体となって多彩な催しを展開することにより地域住民の町並み保



夜は「あかり」たちに灯がともされる



ライトアップされた「うだつ」

美濃市を流れる長良川

岐阜県美濃市

うだつのあがる町並みと 美濃和紙あかりアート展

「うだつが上がらない」は「いつまでも出世しない」という意味だが、この「うだつ」とは何なのか、素朴な疑問を抱いたことがある人は多いだろう。日本家屋の外壁の一部で、隣接家屋との境に設けられた一段高くなった仕切り壁のことである。連焼を防ぐための防火壁であったが、江戸期のいつころから装飾的な鬼瓦や懸魚などの瓦屋根を付加し、裕福な町人がその美を競い合うようになったことから、出世のパロメーターと目されるに至った。

その「うだつ」がまさに艶を競う美しい町並みが残るのが、岐阜県南部の美濃市だ。名古屋から車で一時間あまりという立地でありながら、鮎釣りでも知られる長良川の清流に育まれた自然が麗しい場所である。近隣の関市とともに「関の刃物、美濃の和紙」としても有名な伝統産業を継承していることでも、その名は全国に知られている。美濃和紙はいまでもなく、枯れることのない清水を利用した手漉き和紙で、滑らかで均一な風合いから、書

画はもちろん、障子紙など建築資材としても広く利用されてきた。一三〇〇年の伝統を誇る。

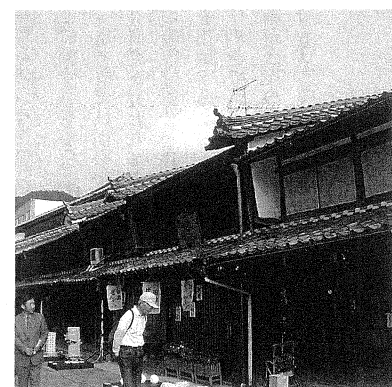
東西二本の街路とそれらを結ぶ南北方向の四筋からなる目の字型の町割り、江戸初期に開拓され、一七世紀はじめに尾張藩領となつてから水運による物資集散の拠点川湊として大いに栄えた歴史をもつ。重要伝統的建造物群保存地区に指定されている旧市街地には、堂々たる瓦葺きの町家が並び、そのうち旧今井家や平田家、重要文化財でありながら今も造り酒屋を続ける小坂家などは、昔の姿を今に伝える貴重な存在だ。土間から座敷、奥の庭に続く屋敷内には随所に生活美と素材の息づかいが感じられ、日本家屋の良さに今さらながら心うたれる。

この「うだつのあがる町並み」を舞台に一年前発足したのが、「美濃和紙あかりアート展」だ。地域の伝統工芸である和紙をもっと多くのの人に知ってもらうために、町のボランテ

の心を打つ。「まちおこし運動」の神髄を見る思いだ。

こうした活動が総合的に評価され、このイベントは地域活性化センターが選定する「ふるさとイベント大賞」の第六回大賞を受賞した。全国で活性化するまちおこしイベントの頂点に立ったのも、町並みの活用、伝統工芸の活性化、町ぐるみのボランティア、一般の人や子どもへの参加性などさまざまな点で、このイベントがユニークであったからだろう。

このイベントが始まってからは、市や観光協会の尽力で、メインストリートの電線がすべて地下埋設されたり、市内のポケットパークが整備されるなど、ハード面での再開発にも拍車がかかった。景観事業を見直すきっかけをつくり出したという意味でも、この催し物は特筆に値するだろう。同市には他にも、桃色に染めた和紙の花びらで飾られた花みこしが町中を練り歩く春の「美濃まつり」、掛け合



たくさんの「あかり」が展示された町並み

イア団体をはじめた一般公募形式のアート作品コンクールである。毎年一〇月中旬の週末に、全国から集められた和紙と照明を使った立体造形作品が町並みの中に展示される。秋の夜長、日本家屋の美しい町並みを背景に、風合い豊かな和紙の灯具が優しい明かりを投げかける様子を楽しむため、会期中は市内外から多くの観光客が訪れる。

第一回目には出展数が少ないのを心配した関係者がこぞって作品を出したというエピソードも今では笑い話になるほどの盛況ぶりである。第一〇回目を数えた平成一五年には、一般の部、小中学生の部あわせて出展数六五一、来場者数は二晩で延べ九万人を数えるまでに成長した。大イベントである。一〇年間で応募数は八・五倍も増加した。一日目に点灯式に続いて審査が行われ、二日目に表彰式が催される。大賞、ライトアップ賞と呼ばれる審査

い漫才形式の伝統小話芸能「仁輪加（にわか）」などが、一般市民の手によって大切に継承されている。「こども仁輪加」では芸能様式と方言の伝承が今に息づいている様子がうかがわれる。微笑ましい余興である。

来年愛知で予定されている「愛・地球博」では、過去の優秀作品が日本の明かりを代表するオブジェとして会場に展示されることが決まっている。和紙は近年その耐久性、強度、テクニチャーなどが見直され、海外での展示会・博覧会に引き合いが増えている。その中で、美濃和紙が今後ますます普及し、地元産業の活性化につながるが、大いに期待される。

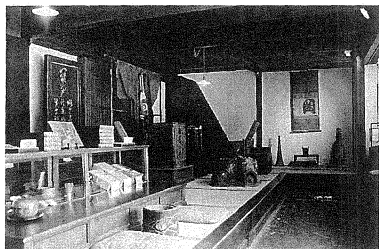
四年前から一般の部の審査員として美濃市のおつきあいが始まって以来、私にとって秋にこの地を訪れることは、まるで桃源郷に帰るような感動をもたらししてくれる。自然を吸い込むこと、和紙のやわらかさに触れること、和の明かりの安らぎに接すること、うだつのあがる町並みをめぐることで、そして何よりも彼の地の人々の熱意に接することが、どれだけ心を満たしてくれることか。

(株式会社)・O・O・N代表 照明デザイナー
石井リーサ明理

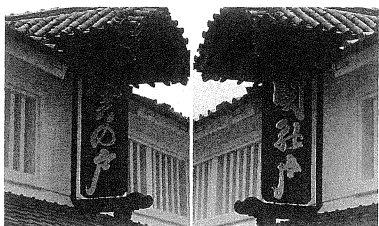
問い合わせ先…美濃和紙あかりアート展実行委員会
tel: 0575-35-3660
e-mail: info@minokanko.com
HP: http://www.minokanko.com



江戸後期に建築された関宿を代表する老舗（服部家）



往事そのままの店内（服部家）



庵看板 左右で文字が違っているのは、旅人が進む方向を間違えないようにするためと言われている。旅人をもてなすことで暮らしをたててきた先人の知恵のひとつである。

に選定されてから、今年はずいぶん二〇〇年になる。その間、さまざまなハードルにぶつかりながらも、官民の協力で今日の町並みができあがってきたのを見ると、やはり感慨を禁じ得ない。

東西一・八キロの町並みを歩いてみよう。

左手に、伊勢別街道の起点である大鳥居。西に向かつて、土色の街道に沿って両側に家並みがまっすぐに延びている。ゆるやかな勾配の坂をのぼって後ろを振り返ると、そこはまさに宿場町。所々に復元された新しい格子の家が混ざっているが、低い屋根狭い道の景観が素晴らしい。

かつて、空を見上げるとあたりまえのようにあった電柱や何本もの電線が撤去されたとき、私たちはあらためて視界をささぎるものがない

空の広さに驚いたものだ。今、江戸時代の人々と同じ空の大きさを体験できるのもうれしい。

中町に入ると、宿場の中心だったころの大きな建物が目に入る。大旅館や商家を復元した資料館。本年五月、かつての場所に、かつての大きさを復元された高札場は、まるで前からずっとそこにあったような風情で、町並みに溶け込んでいく。

新所の町並みのはずれは西の追分。東海道と大和街道の分岐点。三年前からの松並木復元運動で毎年植えられてきた松も、小さいながらもしっかりと根をはっている。

この二〇〇年、関宿は地味ながらも着実に宿場町としての体裁を整えてきたのだ。

この町を訪れる人々も徐々に増え、毎日住民とのふれあいが、そこかしこで見られるよう

になっている。その中から、私たち住民にとっての町並み保存の意義、客観的な評価、今後の指針のヒントといったものを、日常的に考える住民も多い。住民意識は著しく向上してきているのだ。

特に、この数年関宿を訪れる人々から、

「この町を歩くと、心が落ち着く」

「見るものすべてがなつかしく、心が癒される」

などの言葉を聞くことが多くなった。そして、これらの言葉は年配の方々に限らず、若い人々からも聞かされることが多い。

東海道を歩いてきた青年も、やはりその中の一人である。

町並み保存を始めた当初、まったく意図していなかったこの癒しの効能に、私たち住民は驚くと同時に、保存の末永い継続に今、肅然として思いをはせている。

小一時間もたっただろうか。

「ありがとうございます、お元気で」と、相変わらずいい言葉を使いながら店を出る若者。外はもうすっかり日が落ちて、街灯に照らされた町並みが美しく続いていた。

「すばらしい未来を」と祈りながら、薄暗い街道を一人歩いていく彼を、私はずっと見送っていた。

関宿重伝建選定二〇〇年を迎えて

真夏の午後六時。太陽はまだ西の山々のかなり上にあつて、日暮れにはほど遠い。

その日も古い柱時計が六ツ打つのを待つて、外の明るさに多少の戸惑いを覚えながら、店のすり戸を下ろしにかかった。



関宿の町並み。空をささぎるものはない

とそのとき、軒先に一人の青年がリュックを傍らにたずんできているのに気付いた。

「どうかされたんですか？」

「今、東海道を歩いているところです。ひと休みしています」と意外にいいねいな言葉。

「まあ、中に入って一服すれば」とうながすと、少し間をおいて、

「ありがとうございます」

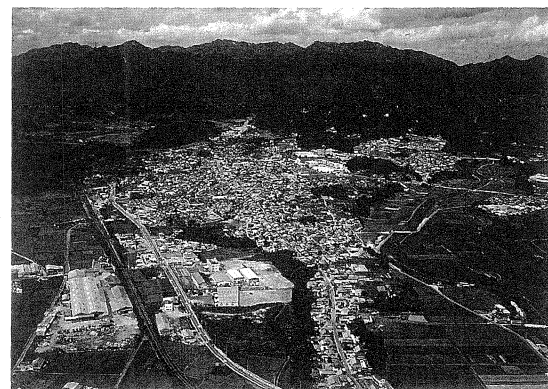
おすおすと店に入ってきた。聞けば、今日はずいぶん四〇キロほど歩いてきたとのこと。

今時の若者にしては、なかなかたくましい。道中で出会った人々のこと、今の東海道の様子など、半時間も話し合ったあと、

「それにしても」と多少しみじみとした調子で言葉を続けた。

「関の町並みに入って歩いていると、だんだん何かなつかしい気分になってきました。不思議ですね。何か、ふるさとという感じがですね」

大阪生まれ、大阪育ちだという彼が、見知らぬはじめての土地に来てふるさとを感じると



関宿を空から見る。奥の山々は鈴鹿山脈

いうのも、考えてみれば実に不思議で興味深いことである。

おそらく、幼いころからテレビ等の映像で、「兎追いしかの山、小鮒釣りしかの川」的なものを知らず知らずのうちに蓄積し、ふるさとのイメージができあがってしまっているのかも知れない。しかし一方で、この関の古い町並みを歩いてきて、彼の中にあつた、昔の日本の姿や様子と結びついて、彼をなつかしい気分

に導いたとも考えられる。

関の町並みが国の伝統的建造物群保存地区



富田林寺内町の町並み

「商売繁盛で、毎持つてこい」
そんな呼び声とともに、「富栄戎」に一年の福を授かるために訪れる人々の活気が、町を包みます。

「富栄戎」は、毎年一月九日（宵宮）、一日（本戎）、二日（残り福）の三日間に行われる「十日戎」です。

「十日戎」は、関西地方に特有の伝統的な祭礼行事で、七福神の一人「えびす神」にその年の商売繁昌や家内安全などを祈願するものです。大阪では、広く一般に「えべっさん」として親しまれ、祭礼とともに出される露店も子どもたちの楽しみとなっています。

富栄戎が行われている富田林町は、永禄年間（一五五八～六九）に興正寺門跡一四世証秀上人が、「富田の芝」と呼ばれる荒れ芝地を購入し、周辺四か村の庄屋株八人に興正寺別院の建立と、町割の建設を依頼したことに始まります。

そして、上人は、この町を「富田林」と名

その際、御神体は、富田林市宮町にあり、地域の氏神である美具久留御魂神社におあずけすることになります。

山中田坂は、新道ができる明治二五年前までは、川の東岸にある山中田村・板持村と富田林を結ぶ唯一の道で、この急坂を通って、たくさんの人や物資が行き来しました。

その後、美具久留御魂神社におあずけした御神体は、戦後、「富栄戎講」が誕生し、御神体をお迎えして盛大に祭るようになりました。戦時中には、物資が乏しくなり、規模が縮小していた「えべっさん」も、御神体もどけ、物資が出回りだすと、福引の三角くじを求めて、通りがいっぱいになるなどの賑わいを取りもどしました。

以上のような歴史とともに育まれてきた町は、平成九年一〇月に国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されました。

富田林駅から南に約三〇〇mの位置にあり、

大阪府富田林市

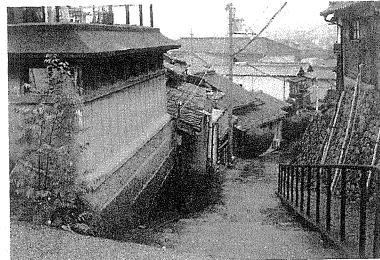
商売の神様が 残してくれたもの

付け、以後現在に至るまでその名前が引き継がれており、市の名前となるなど、現在でもその中心となつていきます。

町は、北を掘割、南を大阪府の東南部を流れる「石川」の河岸段丘による土塁に囲まれた東西約四〇〇m、南北約三五〇mの広がりを持ち、南北六筋東西七町に整然と区画された宗教自治都市で、外敵の侵入を防ぐために道を半間ほどずらし、辻の見通しを悪くするといった工夫もほどこされました。

しかしその後、江戸時代に入ると、幕府の直轄地となつたことで、宗教色は次第に薄れ、東高野街道などの街道の要衝であることや、石川の水運といった地理的な要因に支えられ、周辺地域の農産物が集積し、商業活動が盛んな在郷町として発展します。

寛文八年（一六六八）には、富田林寺内町の中で五一職種・一四九店舗が軒を連ねていたとの記録が残っています。特に酒造業が盛んで、「富田林の酒屋の井戸は底に黄金の水が



山中田坂



富栄戎の祭礼



富栄戎神社にお参り

福を授かって、福引きに挑戦

わく」と謡われるほどの繁栄ぶりであったと伝えられています。

その酒造業者によって、江戸時代から明治初年ころにかけてつくられていた同業者組合があり、その組合は「恵比須講」と呼ばれていました。大阪府東南部、河内地方の酒造業の中心的な組織であった「恵比須講」が、祀っていたのが「富栄戎神社」で、ここで、富栄戎が行われていました。

この神社が建てられた当初は、富田林寺内町の中心を東西に走る堺町（堺筋）の東端にありました。

地元の方によると、堺町には、江戸時代に「石津屋」という屋号の旅籠があり、「恵比須講」の会合の際は、ここに集まったといわれています。「石津」という名前は、堺市石津町という地名と結びついており、大阪府堺市石津町にある日本最古の戎宮といわれる「石津太神社」から、「えびす信仰」を広めるために、富田林寺内町に伝えられたのではないかとされています。また、「堺町（堺筋）」というのは、道が堺に通じていることからつけられ、神社がここに設置されたことにかわりがあるのではないかと考えられます。

ところが、明治時代になると、堺町に新道がつけられることになり、堺町の東端にあった神社は、同じ寺内町にある山中田坂の頂上付近に移されました。

商業の中心として位置づけられてきた富田林町は、しばしば駅前を核とした開発の波にさらされてきました。

しかし、それを乗り越えて、創建当時の町割が残るとともに、江戸時代以降の重厚な商家が数多く軒を連ねる町並みが今日まで保たれたということは、「奇跡」であると言え言う人もいます。

富田林寺内町は、興正寺別院を中心とした寺内町ですが、本願寺派の妙慶寺、融通念仏宗の浄谷寺、富栄戎神社と、さまざまな宗派や神社を受け入れる懐の深い土壌があります。そして、こうした文化的な懐の深さが、新しい文化を積極的に取り入れる気質を生み、町は発展してきました。

一方で、伝統を大切にすることで、貴重な

町並みが残されたといえるでしょう。

そんな中で、商売繁昌・家内安全のために祀ってきた「商売の神様」は、大火などから「家」「町」を守り、商業を盛んにし、「商売の神様」を大事にするという精神が、伝統的な「家」、そして「町」を守っていくという精神につながっているのではないのでしょうか。

現在では、地区内で商売をする店舗も少なくなり、多くの方が住宅として利用するようになりましたが、商売の神様が残してくれた「精神」は、商売とは別に後世に伝えていかねばいけないと思います。

そんなことを想いながら、来年の「えべっさん」での福を夢見ています。来年のことを言うと、鬼が笑うといいますが……。

（富田林市教育委員会生涯学習部文化財課 黒川真一）



灯がともった雪灯籠

をうけ、御神火を移したたいまつを持って宿場内を駆け抜け、本陣前の火籠に点火します。各家の前の雪灯籠にも、火が入られると一層幻想的な風景になります。

その他、約三〇〇kgのボタ（丸太）を引いて、タイムを競うボタ引き競争。各銘柄をあてる利き酒大会。わらじを履いての綱引き大会。そば食い競争。時代風俗仮装大会。など自由に参加できます。仮装行列には分校の子どもたち、青年会、婦人会、個人など、たくさんの方が参加してくれます。また、三年前からは下郷町と姉妹都市の西東京市のご婦人

方も参加して、その場を盛り上げてくれます。お客さんが祭りに参加し楽しんで、また来年来るからねと声をかけてくれます。それがなによりうれしいことです。

私たち婦人会は、二月ははじめ、たくあん漬けをし、雪まつり四、五日前に米こうじで甘酒を造り、雪まつりの二日間、本陣につくったかまぐらの中で、無料でふるまっています。甘酒をよそっていると、これを楽しみに今年も来ましたという常連の人、「はじめて来たけれどとてもいい所で、心が和みますね。今度は家族を連れて来るね」などと、甘酒を飲みながら会話がはずみます。もう一つのかまぐらでは、肉汁をふるまっています。これも大好評です。雪まつりを始めたおかげで、冬でもお客さんが来てくれるようになり、うれしく思っています。

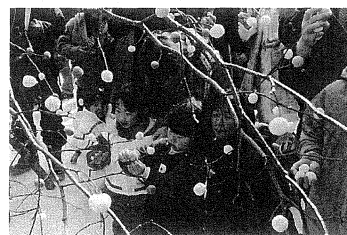
いろいろな面で、集落の人たちが協力しながら、本物を残し、保存はもとより、お客さんが大内に来てよかった、また来たいなど思えるような、心が和む大内宿にしていきたいと思っています。（下郷町大内婦人会会長 浅沼恵子）

【下郷町教育委員会からのお知らせ】

本文の中に登場した本陣というのは、昭和五十九年に古資料等をもとに復原された建物で、「大内宿町並み展示館」として下郷町が運営しています。

二月（土）、三日（日）の雪まつりのためつくられたかまぐらをご覧になった前後に、ぜひとも、この町並み展示館にいらして下さい。

（下郷町教育委員会文化財保護係）



団子さし



大内婦人会出店

かまぐらの上でミカンまき

昭和五十六年に国の「重要伝統的建造物群保存地区」に選定を受け、日本の原風景である茅葺き集落として保存に取り組んでいます。当時はこんな山中に観光客が来てくれるだろうか、といった不安がありました。時は流れて、現在では多くの観光客に訪れていただけるようになりました。

大内宿には、四季折々の風景があります。

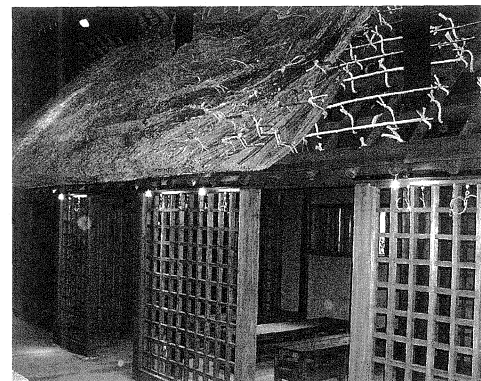
ここは会津西街道、大内宿、かつては会津藩の参勤交代や江戸への廻米路として、また、物資輸送のための、中付駕者の往来で栄えてきた宿場町です。

観光客の人たちが、集落を流れているきれいな川の水と、きれいに並んでいる茅葺き屋根を見て思わず、「これはすごいね。タイムスリップしたみたいだ」などと話しています。また、軒先では「おばあちゃん元氣だった。また来たよ」「あらまあ、よく来たね。お茶でも飲んでがんしょ」「いつ来てもいいところだね」などと話している声が聞こえてきます。

雪に埋れた宿場の冬景色もまた、趣があつていいのですが、1m以上雪が積もるので来訪者が少なくなります。そこで、雪を利用して冬場の活性化を図るため雪まつりを始めました。今年で一九回目になります。

雪まつりは、毎年、二月の第二土曜日、日曜日に開催しています。大内集落が主催で雪まつり実行委員会が中心になり、集落の人たちと協力して手づくりで行われます。まずはじめに本陣前に大きなかまぐらを二個つくりますが、そのときは集落全員が協力します。完成までは、三日くらいかかります。それが終わると今度は自分の家の前に、雪灯籠をつくりますがこれもなかなか大変なことです。木の枠に雪を詰めて固め枠をはがし、削ってゆきます。傍らで、お父さんたちの手伝いをしている子どもたちの姿を見ているとほほえましく思います。そうこうしているうちに、各家の前には、個性的な雪灯籠ができあがります。

当日、五穀豊穡を願う日本一の団子さしをする。夕方になると、「御神火戴火」が始まります。下帯姿の青年会の人たちが高倉神社でお祓い



本陣(大内宿町並み展示館)内部 茅葺き屋根のできあがるまでを表した展示

福島県下郷町

大内宿と雪まつり



「ひなの茶会」に着物でニコリ

岩村には、中世・近世を通じてお城がありました。戦国時代には織田信長の叔母という女性が幼い城主の代行を勤めたことから、昭和六〇年の「岩村城創業八百年祭」以来、岩村町では町おこしの一環として「女城主のまち」をキャッチフレーズにイベントや観光事業をやってきました。おひな祭りは女の子のお祭りなのでそれとイメージが重なることもありますが、より自然な経緯で行事としてまとまりつつあるようです。

ところで、伝建地区は江戸時代の城下町の一部を含む町屋が建ち並ぶ部分です。今見えている町並みは、重伝建地区であることが不

様に菅原道真公を代用させたり、歌舞伎や民話などを題材にした土雛もいっぱい並べたり、飾り方はとてもお洒落です。飾る場所はショールウィンドウや縁側、座敷、店舗の中など、さまざまです。

また、商工会がこの「城下町のおひなさん」にあわせて、本通り沿いにある無料茶飲み処のスタンブラリー（三月の第三日曜日）や甘酒サービス（開催期間中に数回）といったことをやっています。同時期に例年、町内の造り酒屋さんが「蔵開き」でお酒を振舞ってくれます（二月の日祝日と三月第一日曜日）。また昨年は、公開施設の「江戸城下町の館」勝



普通の家でも道行く人に見えるように

川家」で「ひなの茶会」を催すグループもありました。茶会のお客さまは、観光客より町の人たちのほうが多かったかもしれません。観光でいらした方も、町の人たちのともに楽しんで下さったようです。

思議なくらい、一見して「ふつ」です。しかし江戸時代には、峻険な山城を頂き、岩村川をお濠に見立て木戸で閉ざされた城塞都市のようなどころだったはず。明治大正期には江戸時代の「大都市」の勢い保って人的資源にも恵まれ、かなり広域での経済の中心地でもあったのですが、大規模な物資流通には適さない立地から徐々に経済成長から取り残されて、ただ古いだけの家々が残ったように言われました。城下町であったせいか、厳しい環境のせいか、人々の質実な気質もそれを手伝ったように思われます。そして多くの若い人たちは、都会での成功を目指して町を出て行きました。それから近年、町並みが文化財として認められましたが、一方で保存整備やまちづくりの難しさも経験して、さらに昨年一〇月には市町村合併。良くも悪くもなく物事は一つ処にはとまらないようです。

さて、「城下町のおひなさん」がこれからどうなっていくか楽しみなところ。開催期間は二月の第一日曜日から四月第一日曜日まで。気温は冷たくても、春の訪れを感じられる。このおひなさんたちに、一度会いにいらしてください。

「おひなさん、みして」と言っていただけたら、誰かが「からすみ」をさしあげる、かもしません。

（恵那市教育委員会岩村教育課主査 富田美穂）

岐阜県恵那市岩村町

城下町のおひなさん

岩村の春は遅いです。桜の花がちらほらとほころび始めるのは、四月に入ってからでしょう。ストーブや炬燵もまだ片づけられませんが、このあたりのおひな祭りは旧暦です。おひなさんが飾ってある間、学校はちょうど春休み。二〜三〇年前には大きな子が小さな子をつれて、袋を持って「おひなさん、みして（見せて）」と言って「からすみ」をもらって回ったそうです。ここでいう「からすみ」は、珍味であるボラの卵ではありません。米の粉をお湯で練って砂糖か黒砂糖を入れ、断面が富士山



これがこの地の「からすみ」です

形の型にいれて、または箸で亀甲模様をつけて、蒸したもので、東濃地方に独特なおひなさんに供えるお菓子です。くるみを入れたり、ほんのり色をつけたりして、おひな祭りに彩りを添えます。ただ残念ながら、今の子どもたちにはこのお菓子だけでは少々物足りないようです。そのほかのお供えの定番はちらし寿司、三〇年ほど前まではツボ（タニシ）の味噌汁。おひなさんはタニシが大好きで、自分の耳と交換してもタニシを食べたいと言ったとかで、明治ごろの小ぶりなおひなさんには耳のないものが多いそうです。

数年前あるお店の方が、町を歩く人に見てもらえるようにおひなさんを飾りました。その二年後同じ町内の数軒のお店で、さらに次の年には岩村町商工会の呼びかけで岩村本通り沿いの五〇軒ほどの民家や店舗で、「城下町のおひなさん」を飾るようになりました。中には享保雛と呼ばれるような古いおひなさんもありますが、新旧取り混ぜていろいろです。あらた



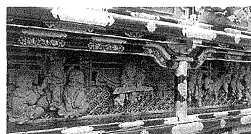
お菓子屋さん（左）にも酒屋さん（右）にも「おひなさん」が

江戸時代より、高山市三町伝統的建造物群保存地区のある安川通り南側の地区では日枝神社を祭神に春の山王祭が、下二之町大新町伝統的建造物群保存地区のある安川通り北側は、桜山八幡宮を祭神とする秋の八幡祭がそれぞれ執り行われます。春と秋の祭りでは、とりわけ屋台の曳き回しが有名です。各町組ごとに屋台を有する屋台組を構成、江戸時代から結束力の強い組織が継承されています。

春の山王祭は、毎年曜日と関係なく四月一四、一五日に神事として大切に行われます。伝統的な町並みの中に、七・八mの背が高く細長い白い蔵を目にすることができます。これは、天保三年（一八三二）の大火事を契機と

高山の祭(春)

さて、安川通りを境に南側を上三町、北側を下二之町、下二之町、下三之町と称し、江名子川以北は太新町とされました。昭和五四年、上三之町と上二之町を中心にした地区が、国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されました。さらに上二之町南部と片原町南部の区域の一部を追加し、平成九年、あらためて高山市三町伝統的建造物群保存地区に選定されました。そして、平成一六年には、安川通りの北側の下二之町大新町も、もう一つの重要伝統的建造物群保存地区として、選定されました。



山王祭屋台の細部

して、町の宝である屋台を守るため盛んに建設された屋台蔵です。屋台自体だけでなく、屋台蔵は町のシンボルでもあり、美しい景観の重要な要素ともなっています。



高山の町並みを巡る祭礼屋台

高山の防災

城下町高山では、享保年間以降、六回の大火の記録が残っています。中でも天明四年（一七八四）の大火では市街地のほぼ全体が焼失したといわれています。天保三年（一八三二）には二度、明治八年（一八七五）には一度大火がありました。現存する町屋の多くは、明治八年以降に建設されたものです。こうしたことから、住戸は各戸で土蔵を敷地の後方に

高山の町並みをそぞろ歩きされるとき、春の山王祭のときはもちろん、そうではないときでも、高山のどの辺が小京都なのか、屋台蔵から華やかな屋台がどう曳き出され、屋台が町並みをいかに彩っていくのか、そしてこうした伝統的なもの以外にも、消火栓等の現代の防災施設が町並みの中にどのように見えかくれているか、というような少々変わった視点をもって町並みを読み取っていく、味わってゆくことをぜひおすすめします。

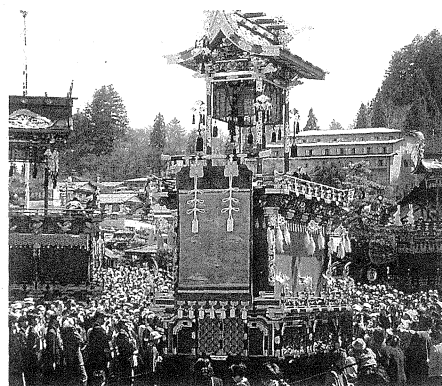
（文化財部建造物課調査官 坊城俊成）

むすび

高山の町並みをそぞろ歩きされるとき、春の山王祭のときはもちろん、そうではないときでも、高山のどの辺が小京都なのか、屋台蔵から華やかな屋台がどう曳き出され、屋台が町並みをいかに彩っていくのか、そしてこうした伝統的なもの以外にも、消火栓等の現代の防災施設が町並みの中にどのように見えかくれているか、というような少々変わった視点をもって町並みを読み取っていく、味わってゆくことをぜひおすすめします。

（文化財部建造物課調査官 坊城俊成）

高山の伝統的建造物群保存地区と祭



高山の春祭り

飛騨の小京都

高山は古くから飛騨の国の中心で、国分寺もつくられました。室町時代に高山氏が天神山というところに城を築きましたが、そのうち、白川郷を除く飛騨の国は三木氏の支配す

るところとなりました。

天正一三年（一五八五）、越前の国大野城主金森長近が三木氏を亡ぼし、秀吉より飛騨一国を与えられました。そして天正一六年（一五八八）、金森長近は、高山氏の築いた天神山古城跡に城郭を建設し、この城の北麓の江名子川と宮川とに囲まれた地を城下町としました。

城下は、金森長近の家臣団の住む武家地が東方に、商人たちが住む町人地が西方に配され、北端に高山城と対面する恰好で白川郷より浄土真宗寺院照蓮寺を移し、武家の菩提寺院等は、江名子川対岸の東山に集められました。

金森長近は、京都の伏見にも屋敷をかまえ、秀吉や家康といった天下人をその茶室に招いたほどの人物で、千利休、古田織部とも親交があったといわれています。高山が飛騨の小京都といわれるのは、この金森長近が高山城下町の計画を手がけ、東山に寺院を集めたといふところにもあるように思われます。



高山の町並みを守る消防団



雪中での消防団活動

高山市三町伝統的建造物群保存地区

町人地には、南北に（宮川とほぼ平行して）三本の道が通され、通り沿いの町を東（宮川から遠い方）から一番町、二番町、三番町と称し、三町と呼ばれました。この南北に走る三町のほぼ中央には、直行する東西方向に安川通りが通されました。元禄五年（一六九二）、金森氏は、出羽の国に転封され、そのころから三町は一之町、二之町、三之町と称されるようになりました。元禄八年（一六九五）には高山城は破却され、武家地は町人地とされましたが、原則、建物を建てることは禁止され、耕地として使用されました。

高山は、二之町を通る越中街道の起点であり、江戸方面の信州街道や京都方面の益田街道へと続き、飛騨地方の生糸や富山方面からの海産物、塩、米の中継地点として繁栄し、江戸時代を通じて明治に至るまで、三町は商業の中心地として栄えました。



美山町北地区全景

京都府美山町

伝建地区を 火から守る一斉放水

京都府美山町は、昭和三〇年の四月に五つの村（知井村・平屋村・宮島村・鶴ヶ岡村・大野村）が合併して誕生しました。

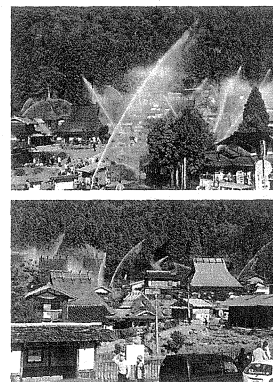
その位置は、京都府のほぼ中央部にあり、北は福井県、東は滋賀県に隣接し、総面積三四〇・四七㎢を有する西日本屈指の大きな町で、総面積の九五％を森林原野が占め、耕地はわずかに二％で京都府内でも有数の山林地帯です。町内を貫流する由良川・棚野川の流域に五七集落が点在し一九三六世帯、五二八五人（平成一六年四月住民基本台帳人口）が農林業を中心に生計を営んでいます。平成五年度には「美しい町づくり条例」や「伝統的建造物群保存地区保存条例」を施行し、美しい環境と景観の保全に努めています。

伝統的建造物群保存地区の北地区は、由良川の最上流、若狭街道沿いに開けた集落です。集落の民家は、ゆるやかな斜面にひな壇のように立ち並び、主屋の周りに石垣をめぐらした屋敷や、畑地、松、柿、社叢などがあちこ

ちに見られ、さらにこの屋敷地間の里道に石塔や石祠が散在し、茅葺き屋根とうまくけこみやかな風情を呈しています。

地区内に存在する茅葺き屋根は、入母屋造りで、千木、破風等の構造美に優れ、山村民家としての特質を有することから「北山型」と称され、価値ある文化遺産として内外から評価を受け「平成五年二月八日、全国で三六番目」の「重要伝統的建造物群保存地区」に選定されました。

茅葺き屋根は、木造茅葺き（皮葺き）のため



一斉放水

構造上、大変火災に弱く、また家屋が隣接しているため、一旦火災が発生すれば類焼による大火の危険性があります。

先人は、火災の類焼をくい止めるために、生垣を植樹したり、家と家の間に水田や畑を設けています。近年では、各家庭において、消火器以外に台所の自動消火器や煙探知器警報器を設置し、早期発見と初期消火に備え、また、区民による自治消防組織による火災訓練や消火訓練を取り組んでいます。

過去の北地区の記録では、昭和一九年に



放水銃を操作する地区の住民

に消火施設の設置を決定し、関係機関に要請を行いました。

その後、「美山町北防災事業に係るプロジェクト会議」を発足し、具体的な計画を決定しました。

その内容は、防災施設として①貯水施設（九七七㎡）②消火施設（放水銃六二基）③配水管布設④受水施設⑤法面保護工事の整備工事を美山町の直轄事業として、平成七年度から七か年事業とし、総事業費七億円で実施することとなり、平成一四年三月二九日をもって完了しました。

しかしながら、工事期間中の平成一二年五月二〇日の未明に、地区の中心施設として重要な役割をはたしてきた民俗資料館が焼失しました。文化庁をはじめ関係機関や各種団体、全国の美山を応援いただく皆様から暖かいご支援をいただき、平成一四年の八月に無事復原することができました。

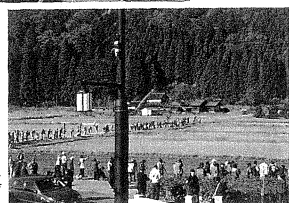
特に、防災施設（放水銃六二基）が完成した後は、年二回点検と訓練を兼ねて、一斉放水を実施しています。

春は民俗資料館が焼失した五月二〇日を教訓として地元「防災の日」と位置づけ、消防団・北村かやぶきの里保存会の協力を得、区民全世帯の立会いのもと放水銃の一斉放水を実施し、秋は、「かやぶきの里まつり」（昨年で通算一回開催）の日に実施しています。

一斉放水をバックに記念撮影する観光客



一斉放水をまじわびる写真愛好家たち



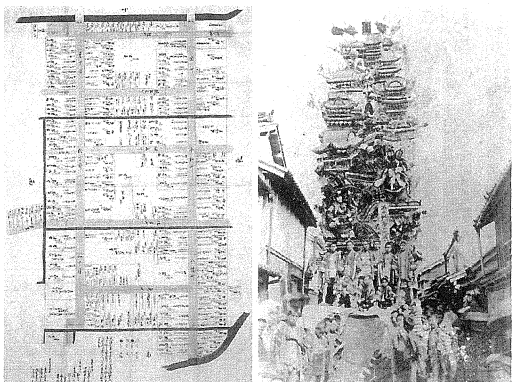
予防面においては、夏休みに子どもたちによる夕刻の「火の用心回り」、地区住民による夜間の火の用心の巡回を実施し、火災予防啓発に努めています。集落内での花火と歩行中の「煙草」の喫煙も全面禁止としています。

火気使用の多様化と伝統的建造物群保存地区に選定後の来訪者の増加（美山町への来訪者、昭和六〇年当時は、町全体で約二万人といわれていたのが、平成元年では二四万人、平成八年では約四四万人、平成一四年では約五六万人、平成一五年では約七二万人）、トタン屋根から茅葺き屋根への復元工事などにより、選定時よりも大火への危険性が大幅に増加し、放水銃の割合はますます大きくなってきています。

（京都府美山町教育委員会 大森弘巳）



月隈山から望む町並み（明治末期ごろ）



元治元年豆田町絵図

大正～昭和初期ごろの日田祇園

昭和四四年には「日田祇園囃子保存会」が、二年後には「日田祇園山鉾振興会」が結成され、祇園祭の振興と伝統文化の保存継承活動が展開されています。また、祭礼の中心行事である曳山行事は毎年七月二〇日過ぎの土・日に開催されていますが、町内では六月から山鉾のお飾りづくりの準備などが始まり、町は次第に祇園一色となります。現在は、二日間で約四万人を超える観光客が訪れています。特にお薦めなのは豆田町の川面に映える晩山（提灯山）です。この他、山鉾や見送りを常時見学できる施設として「日田祇園山鉾

会館（隈町）」がありますが、約一〇mの高さをもった平成山鉾は見ごたえがあります。

日田祇園の起源は明らかではありませんが、当時のありさまは各史料に求めることができます。山鉾に関する最も古い記述は、寛文五年（一六六五）長島家の『御用留記録』で、「山鉾木綿幕勾欄、青杉竹にてはさみ、太鼓斗造つていたことがわかるなど、曳山行事となる前の様子が記された貴重な史料といえます。現在の曳山の成立は、『豊西説話』によれば正徳四年（一七一四）に豆田町と隈町で同時に始



現在の祇園祭

二月に「日田市豆田町重要伝統的建造物群保存地区」（以下「伝建地区」という）として国の選定を受けています。この町が発展形成した背景には、天領（幕府直轄地）として西国筋郡代が置かれたことがあり、九州における政治・経済の拠点地域として商家町が繁栄し、その豊かな経済力をバックに華やかな町人文化が花開くこととなります。その代表的なものが「祇園祭」であり、現在も豆田町・隈町の元気の源として、また夏を彩る風物詩として市民の一大行事となっています。平成八年、「日田祇園の曳山行事」は国の重要無形民俗文化財として指定され、これまでは門外不出とされていましたが、昨年はハワイ最大の文化交流イベントである「二〇〇四ホノルルフェスティバル」に招待される機会を得て、日田の山鉾が初めて海外で巡行するという記念の年となり、「伝建地区」の国選定とあわせて日田の歴史や伝統文化を内外へアピールする最良の年でありました。

現在、日田市には三地区（隈・竹田・豆田地区）に合計九基の山鉾があります。戦後、豆田地区では一時中断していましたが、昭和五四年の「天領祭」の開催や、昭和五八年から開催された草野本家の「お雛祭り」とともに地域が活気を取りもどしていきなかつた。山鉾も復活の兆しが見えてきました。まず、最初に中城町で昭和六一年に復活され、次に同六三年に港町で、平成元年には豆田町の下町通、翌二年には同町の上町通で復活し、以前は町内ごとに輪番制で行っていた山鉾が各町内で毎年出されるようになりました。



伝建地区豆田町一丁目の町並み

大分県日田市

天領日田・豆田町と日田祇園

大分県日田市は、福岡県・熊本県に境界を接する県西部に位置し、今年三月には日田郡二町三村と合併し、市域は東西約二五km、南北約四九kmに及ぶ森林資源の豊富な新市として誕生しました。市内には国・県・市指定の文化財が一五〇件を数え、その内容も史跡・建造物・民俗文化財など多岐にわたっています。また近世初期の町割を残す歴史的な町並みとして豆田町・隈町があり、豆田町は昨年

「日田市豆田町重要伝統的建造物群保存地区」（以下「伝建地区」という）として

国の選定を受けています。この町が発展形成した背景には、天領（幕府直轄地）として西国筋郡代が置かれたことがあり、九州における政治・経済の拠点地域として商家町が繁栄し、その豊かな経済力をバックに華やかな町人文化が花開くこととなります。その代表的なものが「祇園祭」であり、現在も豆田町・隈町の元気の源として、また夏を彩る風物詩として市民の一大行事となっています。平成八年、「日田祇園の曳山行事」は国の重要無形民俗文化財として指定され、これまでは門外不出とされていましたが、昨年はハワイ最大の文化交流イベントである「二〇〇四ホノルルフェスティバル」に招待される機会を得て、日田の山鉾が初めて海外で巡行するという記念の年となり、「伝建地区」の国選定とあわせて日田の歴史や伝統文化を内外へアピールする最良の年でありました。

まったとされています。当時の規模や構造は不明ですが、正徳年間にはすでに現在の形が成立していたこととなります。また、日田を代表する儒学者・廣瀬淡窓は当時の祇園囃子の様子について、『懷旧樓筆記』（天明六年の条）の中で「鼓吹の喧しき」と表現しています。

現代社会における地域のコミュニティや人のつながりが薄れていく中、伝統文化における祭りや伝統行事の重要性は高く、今後郷土色豊かな地域性（個性）を守っていくことが望まれ、次世代に伝えていく必要性を強く感じます。

地域文化を表現する際にこれ以上のものはなく、日本人であることを再認識する精神的な支えとして、参加するものや見るものに活力を与えてくれます。伝統文化のもつエネルギーは人や地域を元気にするだけでなく、次世代への橋渡しの役割をもっていると考えられますが、豆田町の伝建地区を例にとると、歴史的な町並みの保存と伝統行事の担い手が同じ住民であることは大変心強く、これからも引き続き地域の文化を保存継承する土地であり続けてほしいと切に願っています。

平成一八年度には「全国山・鉾・屋台保存連合会」の総会が日田で開催されることになっており、これには全国各地の加盟団体が結集し、盛大な催しが行われる予定です。

（日田市教育庁文化財保護課 吉田博嗣）



重伝建地区の温泉旅館街



その昔タヌキが傷を癒しているところを発見されたという「元湯」

(写真提供：元湯温泉伊藤昇介)

しまれている温泉まつりの日です。「町並み工房」開設の日の夜、保存地区内にある公民館では石見神楽が舞われ、その外では地元の商店会などによる出店がありました。そして保存地区内に二つある外湯、ひとつはタヌキが見つけたという縁起をもつ「元湯」と、もうひとつは明治五年の地震の際に湧出した「薬師湯」では、この日はかりは入湯料が無料になり、多くの人が入湯します。

いろいろ聞いてみると、この地区は昔から温泉と深く結びついていることに気付かされます。昔のこの地区の家にはほとんど風呂がなく、みんな温泉に行っていたということ、おかげで火事が少なかったということ。このお薬師さんのまつりは文化九年（一八二二）六月（旧暦）の史料などが残っており、そのときに相撲を奉納しているなど長い歴史があること。通りに面した湯治宿では、皿や茶碗など食器類でつくった一式飾りの人形や、児童の絵画、習字が展示されていたこと。このまつりを境に待ちかねたように浴衣を着ることなど、昔からある「まつり」はそこに住む人の生



飾製品を使った「一式飾り」
(写真提供：元湯温泉伊藤昇介)

活に密着しており、その地区をあげてみんなが参加していたことがわかります。そして、病が治ったなどの温泉から受ける恩恵に感謝する気持ちや願いがこのまつりを通じて伝わってきます。近ごろのイベント化しているまつりもいいのですが、昔ながらの地域のまつりの歴史や意味をもう一度見直してみながら参加してみるのがおもしろいのではないのでしょうか。

重要伝統的建造物群保存地区に選定されて、建物の外観や地区の歴史的景観は保存され、受け継がれていくでしょう。しかしあいさつをするとか地域のまつりなど、そこに住んでいる人の風習、文化なども受け継がれていくことが本当の意味での保存ということになると感じました。今年度は温泉津の重伝建地区を含めた「石見銀山遺跡」の世界遺産登録の推薦書を提出する予定です。世界に認められる地区を目指すとともに、この地域のよい面が失われず受け継がれていくことを願っています。（温泉津町教育委員会社会教育係 重田聡）

島根県温泉津町

温泉津のお薬師さんまつり



上空から見た重伝建地区



明治5年の浜田地震の際に湧出した「薬師湯」

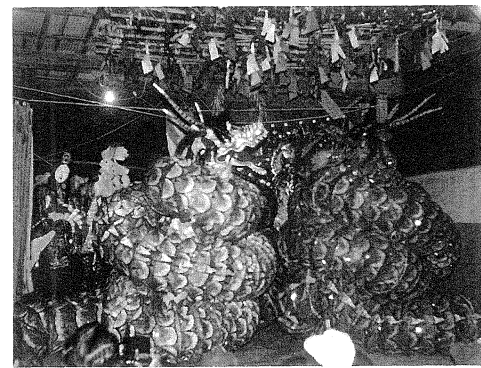
「こんにちは」「帰りました」
この町の人はよくあいさつをします。伝建担当となって町を歩くことが多くなり、歩くことで気がつくことはたくさんあります。そういえば私が小学生のころも、「帰りました」とあいさつしていたことを思い出します。それは先輩もしていたことだったし、後輩も自然とそうしていました。時代が変わってもこのようなことが引き継がれ、残っているのだろうかと思ふようになりました。

この温泉津町は島根県のほぼ中央部、日本

海に面して位置しており、また町域の約八割が山に占められているという海と山に囲まれた自然が豊かな町です。一方で人口は四〇〇〇人を割り、高齢化率は四〇％を超える過疎・高齢化の進んだ町でもあります。

その温泉津町の温泉津地区の一部が、昨年七月に「重要伝統的建造物群保存地区」に選定されました。その名の通り古くから効能ある温泉が湧き、入り江が深く入り込み水深の深い天然の良港（津）のあるところです。保存地区の分類は「港町」「温泉町」。温泉町というのは、重伝建地区では唯一というのが大きな特徴の一つです。

かつてはこの保存地区も、日本はおろか世界経済にも大きな影響を与えた「石見銀山」が背後にひかえるという立地条件により、一六世紀後半からは石見銀山の外港として、また一七世紀末からは北前船の寄港地として位置付けられ、多くの人と物でにぎわう町でした。さらには千数百年前から湧出しているといわ



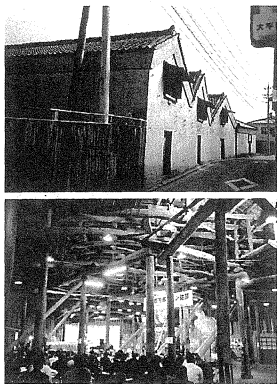
昭和54年の温泉まつりで奉納された石見神楽。演目「大蛇」

(写真提供：元湯温泉伊藤昇介)

れる温泉があり、その効能で全国から多くの湯治客を迎えてきました。

平成八年、この地区を重伝建地区にしようという動きが旅館の女将さん方を中心に盛り上がり、町としても町並みを生かしたまちづくりが必要と考え、平成一五年七月七日、保存地区内の民家の一部を借り、町並み保存推進事務所「町並み工房」を開設しました。

その七月七日といえば七夕ですが、保存地区内の外湯、「元湯」開湯時に建立されたといわれ、寺堂の格天井に村人寄進の絵馬を貼り付けた温光寺薬師如来のお祭りがあります。地元の人には「お薬師さんのまつり」といわれ親



かつての醤油醸造蔵はイベント会場になる

今までは第二次世界大戦前までの建物を伝統的建造物として扱ってきいていますが、文化庁による登録有形文化財の対象となる築後五〇年という、今や昭和三〇年に建てられた建物も含まれるのです。これから佐原の町並

中心とする建物が、今日の佐原のまちの表情となつていきます。

このような背景を考慮し、町並み保存においては全体に一つの復元年代を設定せず、それぞれの建物が建てられた以降の年代で、建物の魅力をよく表せる姿に修理しています。商店の顔となる看板も、積極的に修理し、特徴的な下屋看板の新設も行っています。

また、昨年度は初めて住宅の新築修景の形式として洋館を採用しました。これは主要な交通路であった小野川沿いにかつては数々の洋風医院建築があった歴史があるからです。建物は建て替えられていますが、今日も川沿いに多くの開業医が見られます。

また、昨年度は初めて住宅の新築修景の形式として洋館を採用しました。これは主要な交通路であった小野川沿いにかつては数々の洋風医院建築があった歴史があるからです。建物は建て替えられていますが、今日も川沿いに多くの開業医が見られます。

祭りの期間には、山車が通る道は交通止めになるので、歩行者が通りの真ん中を堂々と安心して歩くことができ、昔の写真に見られるような歩行者が中心の人に優しいまちとなります。いつもは比較的早くに店じまいする店も営業時間を延長し、家々の軒先には提灯が掛けられ、土間に椅子を出して夕涼みしながら、祭り見物が始まります。

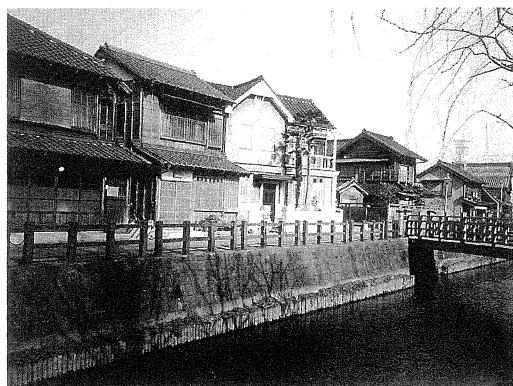
現在電柱の地中化が小野川沿いから進められています。このことにより伝建地区の景観が向上し、往時をほうふつとさせる町並みを背景に人形をせり出した山車が通りを進む光景が見られるようになります。

建物の修理・修景を始めて一〇年経ちまし

まちが活気づく佐原の大祭

普段は静けさを目当てに、全国から大勢の方々が佐原を訪れますが、町並みを中心として行われる夏と秋の大祭の折には、三日三晩お囃子が奏でられ、山車を曳く若者たちの掛け声がまち中に響きわたります。それぞれの山車が、佐原の伝統的な町並みのスケール感にぴったり合い、家並みは祭りのためにあるのではと思えるほどです。この江戸時代から続く祭礼行事は、重要無形民俗文化財に指定されています。

祭りの期間には、山車が通る道は交通止めになるので、歩行者が通りの真ん中を堂々と安心して歩くことができ、昔の写真に見られるような歩行者が中心の人に優しいまちとなります。いつもは比較的早くに店じまいする店も営業時間を延長し、家々の軒先には提灯が掛けられ、土間に椅子を出して夕涼みしながら、祭り見物が始まります。



さまざまな時代の建物が立ち並ぶ佐原の町並み

だが、建物の積極的な活用は始まったばかりです。再生された建物に飲食店が開店したり、若い世代による店が始められたり、少しずつではありますが確実にまちは変化しています。日常の暮らしの中で使われることにより、建物は守られ続けているのです。

さまざまな表情をもつのは、佐原の町並みだけではありません。日常とハレの日、両方があつてはじめて佐原のまちと町並みが息づきます。(佐原市都市計画課主任技師 金出ミチル)

※今年の佐原の夏祭りは七月一五日から一七日に、秋祭りは一〇月七日から九日に行われます。

多様な表情のある 懐かしいまち

江戸時代にかたちづくられた佐原

佐原を初めて訪れた人の多くが、駅から町並みへと続く商店街を歩く間に「懐かしい」という言葉を口にします。ちよつと前の時代の雰囲気を感じる建物を目を見ると、時計の針もゆつくりと進んでいるかのように感じます。

この穏やかな空気と歴史的な建物が軒を連ねる町並みを求めて、年々佐原への観光客は増えてきています。今までは年配の方々を多く見かけたのですが、最近休日には幅広い年代層が町並みを訪れ、にぎわいを見せるようになりました。

伝建地区の中心を南北に流れる小野川は、利根川へと注いでいます。このおかげで佐原は江戸時代から昭和初期にかけて舟運でたいへん繁盛しました。酒や醤油などの醸造業をはじめ物資の集積地として栄え、文化と人との交流する県下有数の都会として発展し、佐原の市街地はこのときに形成されました。

中世から江戸時代に通された道路や路地は、小野川同様に緩やかにカーブを描き、歩いてまわるのにちょうど良い大きさのまちをかたちづけています。高い建物がほとんどなく、背後に緑の山を控えた広い空が印象に残ります。道は細く一方通行も多いので、自動車では移動しにくいのですが、かえって歩行者にとっては、散歩がてら迷いこんだ路地で面白い物を探したりすることができ、発見のある場所となっています。

文化庁が一九七五年に新たに町並みを保存対象とする制度を始めるにあたって、関東では佐原が注目され、調査されました。しかし当時佐原に行けば何でもそうと言われるほど、大きな商圏を抱え、周囲の市町村からの買い物客を集めていたため、地元ではあえて過去を振り返ることをしませんでした。時の移り変わりとともに人の流れも変化し、まちが静かになったときに、身近にたくさん残されている土地の誇りとなる伝統的な建物を、まちづ



明かりのともった町並みと山車

くりを活かすことを考えたのです。

平成に入り、町並み保存を進める住民団体小野川と佐原の町並みを考える会の拠点となった赤レンガの三菱銀行佐原支店旧本館を市が入手し、平成六年になり市による町並みの建物の修理・修景が始められました。平成八年には重要伝統的建造物群保存地区に選定され、現在の町並み保存体制が確立されました。

時代の積み重ねを体験できるまち

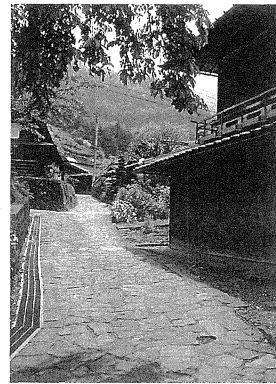
今日見る町並みの大半は、市街地中心部が広範囲にわたって焼失した明治三五年(一八九二)の大火後に再建されたものです。以来各時代の流行を取り入れて建てられた商店を

山梨県早川町

重伝建地区選定一〇周年 記念事業と千灯祭

新緑の木々の間を谷風によつて「ポポー・ポポー」という筒鳥の鳴き声が聞こえる。肩をそつとたたかれていよう、ほんとうに心地よい。

早川町は、南アルプス連峰をかかえる山梨県西部に位置し、人口一七〇〇人弱の町で九六％が森林地で山村文化を多く残す地域です。赤沢は、日蓮宗総本山の身延山久遠寺と七面山敬慎院とを結ぶ参詣道の途中に位置し、かつては全国から多数の参詣者が訪れていました。明治に入り平屋の民家を宿屋にするため、



舗石のある赤沢の道

二階家にする家も出てき、そのたまたまいが切り妻形式の屋根で、特徴のある木造の建物として現在残っています。

赤沢をとる七面山への参拝客は、戦後から交通事情の変化により減少の一途をたどり、若者は労働力として都会に出ていき、年中行事も減ってしまつて活気のない集落となつていました。

昭和四五年ごろからUターンの若者が増えはじめ、静まりかえっている地域を活性化しなければという気運がこの若者たちから出始めてきました。

大なる暗闇の中に突如現れた何百個もの提灯は、壮大ながめで人々を幽玄の世界に誘っています。提灯の明かりを頼りに石畳（八八〇石）を歩くと、いにしえを思い起こし、先祖へのさらなる愛着を感じるひとときとなっています。

赤沢は、平成五年七月一四日に国の三五番目の「重要伝統的建造物群保存地区」として選定されました。以来、関係者の並々ならぬご努力により修復工事も毎年行われ、平成一七年五月には、集落唯一の「そば処」もオープンすることができました。

本年、五月二〇日から二九日の一〇日間、重伝建地区選定一〇周年を記念し、赤沢の町並み運動を考える機会とするため「竹に集う赤沢宿」保坂紀夫展を行いました。

竹造形作家の保坂紀夫氏の作品を伝統的建造物の中に展示し、イベントでは、「法話と赤沢宿」「落語 東家夢助、夢蔵」「シンポジウム・フィールドミュージアム赤沢宿」「尺八と十弦ギターの夕べ」「早川ウインドアンサンブルと奈良田民謡」を開催しました。

シンポジウムでは、辻一幸町長がコーディネーターを務め、宮崎清・早川源・保坂紀夫の三氏のバネラーとともに、「フィールドミュージアム赤沢宿」と題された、赤沢のこれからのを考えるパネルディスカッションを行いました。その内容を要約すると

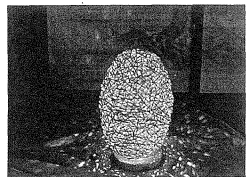
宮崎清氏は、「かつて生活の中で使われる物を作っていた技術を若い人たちに伝承していく機会がもてると思います。自分の楽しみ、生活のために作る。そんな生きた物作りから将来の赤沢が見えてくるのではと考えます。赤沢の人たちが自分たちの利益のためじゃなく次の世代に何を残すかということに一生懸命頑張っていることはすばらしいことで、続けていつてもいいと思います」と述べています。

早川源氏は、「赤沢の景観を見せ物にするのではなく、ここで生活して自分たちのため、子どもたちのために時間を使う。そういう地域づくりをやってほしい。それができるところだと思います。赤沢には、一〇〇〇年を越える歴史があるわけで、決して稼ぐためだけでなく社会のためにそれを還元していくという考えを赤沢の人たちに提起していつてもいい」と述べています。

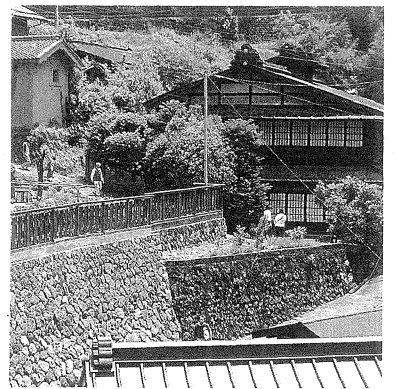
保坂紀夫氏は、「まず、訪れてくる人たちに



赤沢を散策する家族連れ



「竹に集う赤沢宿」保坂紀夫展より



赤沢の町並み

なかでも昭和六〇年、村おこしの大きな事業として取り組んだのが「千灯祭」の復活です。この祭は、お盆に「先祖の霊を迎え・送る」というねらいから昭和二五年ごろまで行っていました。お盆に、老若男女があるさへ帰省し、集落が一番活気づくときで、今でも一番大きな行事となっています。

集落への入り口から集落内の道まで、約三kmにわたって一列または二列に提灯をつり下げます。盆踊り会場である広場がメイン会場で、中央に舞台があり、提灯が放射状にたかれています。二基のかがり火がたかれ特設の露店も設けられています。メイン会場では、盆踊りや歌謡ショーが行われていましたが、最近では演奏会と花火大会に変わっています。

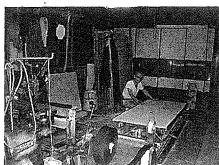
受け入れ、ホッとする空間を提供することからスタートしたかどうか。早川は、非常にユニークな広大な町ですから町内の連携、近隣との関係を大切に、よその地域と交流をしながら、長期計画で少しずつよくしていってらうと思っています」と述べています。

また、「尺八と十弦ギターの夕べ」では、保坂紀夫氏の「既成の展示場ではないところに芸術作品を展示する」という新しいスタイルと和楽器と洋楽器の二重奏という新しいスタイルへの挑戦が伝統的建造物の中で調和し、密度の濃いセッションとなりました。すべての方々が保坂氏の作品と和洋楽器の演奏に感激し、芸術に新たなページを加えた夕べとなりました。

一〇日間という長期のイベントは初めての試みで、当初は大変不安でしたが、日がたつにつれ多くの人々が訪れてくださり、その心配も解消しました。一〇日間、のべ二〇〇〇人の皆さんが赤沢を訪れてくださり、おかげで喫茶店やそば処も繁盛し、大成功で幕を下ろすことができました。

数々の容易でない取組を克服し、成功に導いてくださった多くの方々に心から敬意と感謝を申し上げます。今後、このイベントで得た教訓を個性を磨く村おこしへの挑戦のために役立てていきたいと思っています。

（歴史的文化的財保存地区保存審議会会長 望月和男）



畳屋の牛首さん



馬場農機商会



松本餅店



骨董屋の倉八さん

今、郊外に大規模店舗が数多くあり、だいたい何でもそこでそろってしまっていますが、特別注文、商品品定め相談、取扱説明を受けたなどの場合は、専門店でなければならず、またアフターサービスをちゃんとしてほしい場合も安心です。馴染みの客として立ち寄り、世間話をしながら、その内注文するからと時間を過ごす、これ、昔の店の形なのです。町並み保存を急ぎ、完全なる伝統的建物様式を短期に完成させようとすると、下二之町の専門店は、営業しにくくなるかも知れません。町の経済活動を見据えながら、伝統様式を温存してもらう必要があります。

店の主人に聞きました

畳屋さんの牛首さんに聞きました。先祖は、金森時代からの職人だと言います。金森氏は驚見という畳屋を高山へつれてきましたが、驚見の弟子が牛首さんの先祖と伝わります。昔は、五尺八寸の「五八間」畳を販売していて、大工は畳屋の寸法に合わせて間取りを決めていました。しかし今では、メートル法になってしまいい、その都度畳屋が測りにゆかなければなりません。今日も牛首さんの縫い針がしっかりと動きます。

餅屋さんに聞きました。今四代目といいますが、扱っている餅は、正月のお鏡餅、法事用のオケソク、笹団子です。オケソクは一袋七個入り、直径七cm、大きめですね。笹ダンゴは新鮮な笹の上にあんこがたっぷり付いた柔らかいモチが乗り、まことに美味しいかぎりです。午前中に完売になるそうです。

農機具屋さんに聞きました。この店の前身は長野県上田市から高山支店としてやってきた馬場商会で、番道具を販売していました。現当主の先代が店を引継ぎました。町の人はあまり関係ないが、高山市域のお得意さんがいて、土、日でも機具修理に出向くといいます。トラクターや、コンバインは二、三〇万円ですが、売れるそうです。

骨董屋さんに聞きました。今の当主は、三代目だそうです。馴染みの客と、飛び込みの観光客が相手ですが、客の割合は半々だといっています。「げつもの」といって、旧所有者の歴史と、そのモノの民芸としての芸術性を楽しむのだといいます。

菓子屋さんに聞きました。今三代目といいますが、通常、法事で使用する落雁の製作販売をしています。三、六月ヨモギ饅頭、夏は水羊羹、九月は栗寄せを売っています。季節を感じることが出来る店です。

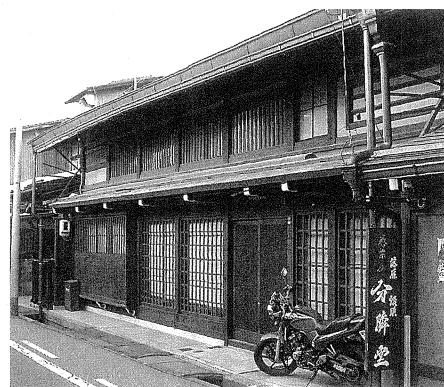
ここ下二之町は、特色ある専門店が今に残り、高山市民が用事をすませることが出来ます。交通混雑時もアクセスしやすいこの町は、今日も馴染みの客が訪れています。

(高山市郷土館館長 田中 彰)

市民が用事をする町

下二之町には、かつて商人町であったにぎわいが今も残り、高山市民はこへ用事に来ます。どんな店があるかという、時計店、表具師、菓子屋、餅屋、クリーニング屋、骨董屋、農機具屋、畳屋、文房具店、家具店、郵便局、一刀彫店、料理屋、喫茶店などです。観光客向けの店は味噌屋、民芸品店など数軒があるだけです。

しかし元禄五年、金森氏は山形県上山へ転封となり、金森氏の時代は一〇七年で終りました。飛騨は幕府直轄地になってしまい、城下町のうち、城郭と武家屋敷が取り壊されました。幕府から代官、後、郡代が二五人、飛騨国統治のため入府し、一七七年の幕府時代がついてきます。



下二之町の伝統的様式建物

城下町の歴史

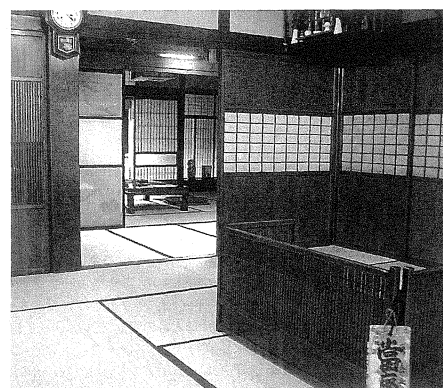
城下町高山は四〇〇年前に金森氏が都市計画をしました。城は国内に二つとない美しい姿をしており、商人町も、前領国地の商人や近江商人たちを招いて最強の経済体勢を敷いています。日本列島の中央部、山間地の盆地にあって、どうして商人町が発展し続け、さらには温存されてきたのか、それは金森氏の東西南北街道の計画的整備、そして防衛と経済面での計算されつくした城下町づくりにあります。また、精神面での統治と懐柔策についてもキメ細やかになされ、領国の安定につながっています。

が続きます。金森氏が山形県上山へ領地換えになったとき、商人や下級役人はそのまま高山にとどまり、経済を発展させ、上品で上質な文化を築き上げました。

さて、明治を迎えた商人町は昭和一〇年代ごろまでは、高山のにぎわう商店街として繁

市民が用事をすませる町

岐阜県高山市



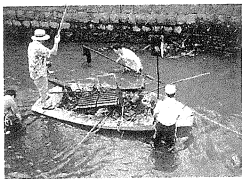
柴田家町家内部

栄しました。しかし昭和九年の高山線開通以後、商店街の中心地が西方向へ移り、旧城下町の商人町は次第に仕舞屋（しもたや・商店をやめた家のこと）となってゆきます。

「下二之町・大新町」が町並保存地区に

昭和五四年、「三町」が国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されました。それ以来、この三町は古い町並として格別賑わう町並保存地区になりました。しかし、高山の商人町はもと広く、北方の商人町の町並保存は放置して置いてよいのかと危惧され、住民運動が始まりました。

その甲斐あって、平成一六年、二か所目の



町並みを貫いて流れる小野川を清掃する



伊能忠敬旧宅前に架かるジャージャー橋

町の真ん中を小野川が流れ、川面には、微風に揺らぐ柳の枝と商人の家並みが映し出されます。江戸との交流で栄えた舟運の宿場は、物資だけでなく多くの文化を引き継ぎました。夏と秋に行われる佐原の大祭にも江戸情緒が色濃く残されています。蘭学書などを手に入れることができる地にあった佐原村は、正確な日本地図を初めて作った伊能忠敬を輩出しました。

住民による町並み調査

一時は小野川に蓋をして駐車場の整備を切望していた商店主も大勢おり、大型店出店などで経営に窮りを感じていた人もいました。そのような時に建物の保存活動は困難な作業で、何度か失敗をしていました。

平成三年に一人の市職員の呼びかけに「佐原の町並みを考える会」が発足し、勉強会が始まり、佐原の郷土史、伝建制度の仕組みなどについてお話を聞きました。毎回参加者が

なしで建設され、《協》の力は三つの地域が力を合わせ、かなえた橋と命名された経緯も知りました。

協橋は、その以前に大橋と言われ、たもとに火の見櫓が建ち、番小屋と厠があり、毎日人が詰めた自衛消防所、はてはその厠の人糞拾得権で争いが絶えなかったことなど、考える会が本拠地とした赤いレンガ建ての三菱館で自慢げに話す人の輪が広がるようになりました。会議の終わった後も話は弾み、八つ時を過ぎても三菱館の明かりは消えませんでした。

我々の祖先が「わが町は自分たちで守る」との精神で多くの財力と知恵を出していることがわかり、自分たちが何をすべきかの目標が見えてきました。

この調査結果にもとづいて、平成五年に「考える会」が「佐原市佐原地区町並み形成基本計画」を作成し、各町内に出張し説明会を開催した後、歴史的景観にかかわる市条例の制

定を市長ならびに市議会へ要望したことに始まり、佐原の町並み保存の基礎がたちづくりました。

小野川清掃からご褒美

重要伝統的建造物群保存地区の選定を受けるための文化庁への書類提出の際、地域住民から町並み保存への同意の印鑑をいただく必要がありました。一国一城の主である商店主から押印をいただくには不安があり、反対の理由もさまざまでした。その対策の一つとして、ドブ川と化した小野川の底さらいを執行したのでした。

川底から工事跡のコンクリートガラ、投げ捨てられた自転車、道路標識、ビン・缶はもちろん沈没船まで拾い、護岸に上げるのに建設機械が必要となりました。すさまじい悪臭に悩まされ、二度と川の中に入る気になりませんでした。住民の方々の賛同も聞こえ、二か月後、用意万端再度実施されました。

おかげさまで考える会は地元住民たちの絶大な信頼も得て、地区内の押印達成率九二%となり、地区は平成八年に重要伝統的建造物群保存地区の選定を受けることができました。

その後は、香取土木（現香取地域整備センター）・香取建設業組合・佐原市の協力を得て毎年続けています。その結果、四年ほど前からタニシやカラス貝などの生物が見つかるよ

うになり、楽しみもできたのです。足の脇を魚が泳ぎ去り、蛙の姿も確認されるようになりました。水草も生えて、塊の輪が下流方向へ三つ四つと増えていきました。

浮き草のコウホネから進化し、水中で育つナガバコウホネの生息が確認され、昨年、千葉県指定最重要保護生物と発表されました。コウホネの葉は、佐原中学校の徽章にかたどられており、この種の植物はすべて保護の対象となるそうです。さらにナガバコウホネは世界で唯一、小野川にしか生息していません。

《恩恵をもたらす小野川、大切にせよ!》とご先祖様よりご下命がなされた気分です。今年もこの言葉を肝に銘じ小野川清掃を行います。

どんな文化財もあるというだけではただの物にすぎません。路傍の石も磨けば道祖神であったりし、そのいわれ因縁や製作年代、歴史背景を考えれば物の魂に触れ、感動を与えてくれます。

これからも「考える会」はこの磨きの作業と調査をこつこつと続け、この町並みを誇りと思う方々を擁護し、増やしていきたいと思っています。

(特定非営利活動法人小野川と佐原の町並みを考える会事務局長 佐藤健太良)

「意見・質問はeメールにてお送りください。 sawara.machinami@sky.plala.or.jp

千葉県佐原市佐原

まちづくりは人づくり 佐原っ子の底力

減っていくなか、小野川の大切さに気がついた会員は、会発足の半年後、川の保存もすべしと、名称を「小野川と佐原の町並みを考える会」(以下、「考える会」と変更しました。会員減少に歯止めをかけるためにも「自分たちで何かをしよう」と町並みの建物を建設年代別に色分けした地図の作成を始めました。蔵や商家など町並みの家々を一軒ずつ回って所有者に聞き取り調査をし、写真を撮影し、建物の特徴を調査票に記入してみました。すると、第二次世界大戦後、近代化の名のもとに店舗の前面をモルタル塗りの壁で覆った看



ボランティアによる町並み案内



旧協橋、明治15年築

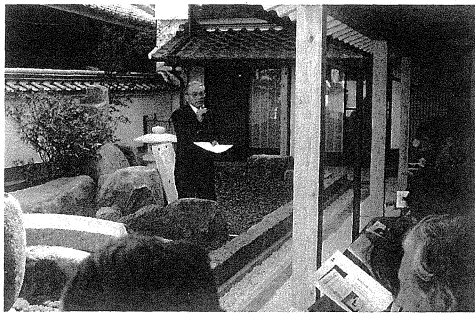
板建築を含め、店舗や住居など多くの建物は明治二五年の大火(市街地の半分を消失)後に建築されたものとわかりました。ほとんど建物は明治、大正、昭和初期に建てられ、修理さえすれば、懐かしい家並みが再現できると、会員同士確認しあったのです。

その後の調査では、一層気合も入り古文書や町内の記録にも興味をもち、わかったことを持ち寄り、昔語りをしておりました。

疫病の恐ろしさから町中の全部の家屋が中庭を設けた町家造りだったことや、寛永期に牛頭天王社を遷座させ、疫病封じの祭を執り行ったのが佐原の大祭の起こりとなったことを学びました。

小野川に架かる樋橋(通称「ジャージャー橋」)がかつては川の上に水(佐原村用水)を渡す木製の太樋で、掛け渡された板一枚の上を人が通っていたことや、立派な石造りの隻眼橋であった協橋は、明治一五年に新宿・本宿と牧野地区がお金を出し合い、公的な援助

町並みのランドマークとなつて
いる煉瓦造の三菱館



昨年の白壁おなんど塾の様子



しらかべ学遊館展示室

います。これらの中には江戸後期の建物もあり、選定地区のほぼ中央部に国指定重要文化財の国森家住宅があります。そのほか小田家・佐川家・辻家など近世に活躍した柳井商人を物語る典型的な町屋が四〇数戸あり、瀬戸内の商都として繁栄した面影がしのべれます。

柳井商人の商いは、主として柳井木綿・油・和ろうそく・醤油・塩・金物などで、交易範囲は、西は九州五島列島から、東は大坂にまで及んでいました。

国森家の場合、手船商から布木綿の反物商で財をなしています。また、室屋は手しほりともしほ油の製造からびんつけ油の製造販売

を業として富を蓄積しています。

選定地区の東端を南北に走る柳井駅前の線路を隔てた東側に、県指定有形民俗文化財の小田家の生活用具・商家資料・町屋があります。小田家は、柳井津で大年寄格を代々勤めた代表的な商人でした。元禄元年（一六八八）から反物・打ち綿・油の取り引きを始め、びんつけ油の商売へと拡張して、五島列島から大坂までの取り引きで、富を蓄積しました。領主に対してたび重なる多大の献金をして御用商人、士分格に取り立てられています。現在当時の様子を残す町屋一〇棟ほか、生活用具一五五三点、文書一〇一点のすべてが、一括県指定されています。

白壁の町並みの西端部近くに、商家を修復した柳井市「しらかべ学遊館」があります。平成一六年一月一日に開館した展示室、学習室、事務室の建物からなる施設のほか中庭が設置されています。展示室は、商家の母屋の一階を改築して活用し、二階は畳敷きの和室と板敷きの間になつています。

学習室は、土蔵の倉を改築して図書を備えて調べもの勉強やひとり学習ができるようになっており、児童生徒をはじめ市民に広く開放しています。事務室には、文化

財・子ども会・青少年育成センター・地域こども教室・学校支援ボランティアの各事務担当が非常勤で動いています。

これらの施設をフルに活用して、毎月第三土曜日の午後二時間、地域こども教室「昔の遊び伝え隊」を開いています。簡単な工作や遊びをとおして、熟年から幼児・児童へ知恵や文化を伝える活動です。

昨年の一月三日（祝日）の柳井まつりの際に、伝建地区内において柳井中央商店街振興組合による「白壁江戸祭」が開催されました。組合に加入している地区住民との話し合いの中で、開館して間もない「しらかべ学遊館」を活用し、何らかの講座的な催しができないかということで、その一環として、教育委員会も共催という形で中庭での青空歴史講話を開きました。柳井津は江戸時代に岩国藩の「御納戸」と呼ばれて繁栄したことから、歴史講話を「白壁おなんど塾」と命名して、各三〇分間の四講座「熊毛王国」「周防国源平合戦」「柳井津の商人」「柳井津の風俗」で、のべ八〇人の受講者となり、当初の目標を達成することができました。

なお、今年度も同じ日程で第二回「白壁おなんど塾」を開催すべく準備を進めているところですが、

（柳井市教育委員会生涯学習課社会教育指導員 松岡睦彦）

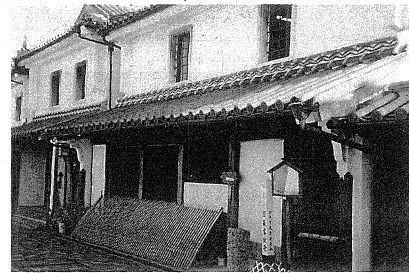
山口県柳井市

来んさい、見んさい、寄りんさい
白壁の町並みとおなんど塾

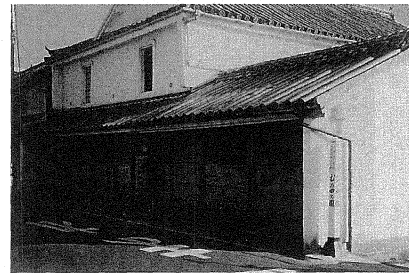
山口県柳井市は、本州西端に位置する山口県の東南部に立地する人口三万六七〇〇人あまりの町です。柳井市の産業は、中心部が主として商業、周辺部は農業、沿海部に漁業と工業が若干みられます。町の東南に開ける瀬戸内海を挟んで、南東方向に四国の愛媛県、南西方向に九州の大分県があり、海上交通に

より原始時代から人々の交流をはじめ、日常品の物々交換や文化交流も盛んであったことが婚姻関係・ことば遣い・遺跡からの出土品等でわかっていきます。

小説家の松本清張は、『花実のない森』の中で柳井の風景を次のように著わしています。「珍しい町の風景だ。近年、こういう古めかしい場所がだんだん少なくなっている。世に有名なのは伊豆の下田と備中の倉敷だが、ここにもそれに負けないような土蔵造りの家が並んでいる。歩いていて人間も静かなものだし、店の暗い奥に座っている商人の姿も、まるで明治時代からその習慣を受けついでいるような格好であった。（以下略）」



国指定重要文化財国森家住宅



県指定有形民俗文化財商家博物館「むろやの国」

柳井川下流の左岸に沿ってのびる古市・金屋の白壁の町並みは、中世末に短冊状の町割ができはじめ、江戸時代中期には間口幅が、ほぼ三間半の広さに拡大して、宅地が石積み水路で区切られるようになり、江戸時代末から明治時代初期になって、現在の町割に近い状況になったようです。

柳井市古市・金屋地区が、伝統的建造物群保存地区に選定されたのは、昭和五九年一月一〇日で、東西方向に伸びる約二〇〇mの町並みです。現在の建造物の多くは、白壁しつくい土蔵造りで、入母屋妻入りになって



柳井市古市金屋地区の白壁の町並み

享受し暮らしてきた十根川保存地区の人々は、自然への畏敬の念、山の神への祈りを大切にしてきました。その信仰が暮らしの中に根付き、神への感謝の現れとして、正月・お盆・山の神祭りなど多くの年中行事や、臼太鼓踊や神楽などの民俗芸能を今日まで受け継いできました。

なかでも神楽は、神仏混淆の古風な形態を残す神楽として、平成三年に国の重要無形民俗文化財「椎葉神楽」に指定されており、十根川・大久保集落にもこの神楽が伝承されています。神楽は、地元では「冬祭り」「年祭り」とも呼び、村人にとって一年を締めくくる祭

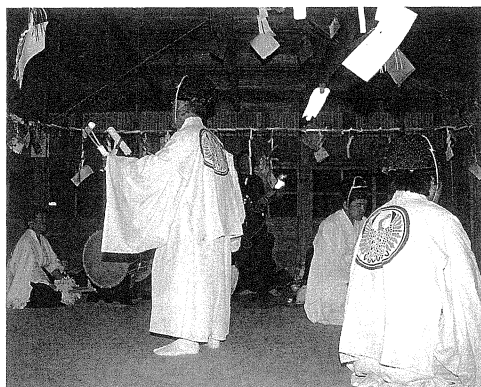


十根川神楽「森」

りであり、そこに生きる人々の暮らしにうおいをもたらし、住民を結集するために大切な役割を果たしてきました。

十根川神楽は、毎年二月第三土曜日から日曜日にかけて、五穀豊穡・無病息災を祈願して行われています。かつては十根川集落の民家を神楽宿とし、「でえ（客間）」に注連縄（しめなわ）を張り、御幣（みけい）を飾り「御神屋（みかみや）」を設け、三三番を舞っていましたが、現在では十根川神社で行われています。夕方から舞いが始まり、翌朝まで神楽殿で夜を徹し二八番舞い、神送りの後、改めて神社拝殿で宮神楽（注連口神楽）五番を奉納しています。

十根川神楽の舞いには、狩猟の様子を表した舞いなど山岳地帯の独特な演目があります。また、舞いに先だつての唱（うたい）教とよばれる唱え言には、平安後期に歌われた歌謡が伝えられるとともに、修験道の影響も色濃く表れて、全国的にも珍しい演目もあります。



十根川神楽「年の神唱歌」

おわりに

椎葉村でも十根川伝統的建造物群保存地区のみならず、天然記念物（八村杉、大久保のヒノキ）、無形民俗文化財（臼太鼓踊、神楽）、有形文化財（古文書、銅鏡）など、素朴な山の暮らしのなかで、先人から連綿と受け継がれてきた貴重な遺産が数多く残されています。これらは、村民にとってもかけがえのない宝物であり、郷土の誇りでもあります。これから大事に守り育て、後世に引き継ぐことが、現代に生きる私たちの使命だと考えています。

（椎葉民俗芸能博物館係長 黒木光太郎）

宮崎県椎葉村

椎葉村の伝建地区に暮らす人々の祈りと暮らし

はじめに

宮崎県北西部、九州山地の中央に位置する椎葉村は、一〇〇〇mを超える険しい山々に囲まれ、耳川・一ツ瀬川・小丸川の源流をなす緑豊かな自然が残る村です。村の広さは五三六・二km²と日本有数の広大な面積を有し、村の九六％を山林が占める林業が基幹産業の山村です。

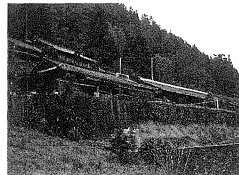
村では、古くから狩猟を営み、かつては焼畑を中心に生活していました。現在でも独自の文化を維持し、神楽、臼太鼓踊、ひえつき節をはじめとする民謡、民話等、古くから伝わる慣習や伝統文化を大切に継承しており「民俗文化の宝庫」といわれています。民俗学の創始者といわれる柳田國男が明治末に来村し、狩猟伝承をまとめ、翌年に『後狩詞記』を出版したことは著名なことです。

椎葉村の伝建地区

伝建地区のある十根川・大久保の集落は、



十根川保存地区全景



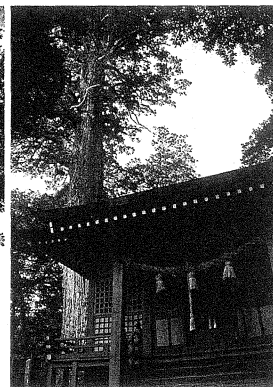
山の傾斜に広がる十根川保存地区

耳川支流の十根川左岸にあり、集落は緩やかに傾斜した南斜面にまとまって位置し、集落の背後や前部は急傾斜地となっています。この斜面が石垣で築成された屋敷地および階段状の農地を配列し、山村独特の歴史的景観がよく残されています。平成一〇年に重要伝統的建造物群に選定され保存が図られています。

椎葉村は、平家落人伝説を伝える秘境として広く知られてきた村です。椎葉に伝わる「椎葉山由来（十根川神社蔵）」「椎葉山根元記」の古文書によると、平家追討の命を受けた那須与一・宗高の弟大八郎宗久が豊後路から鞍岡



八村杉



十根川神社と八村杉

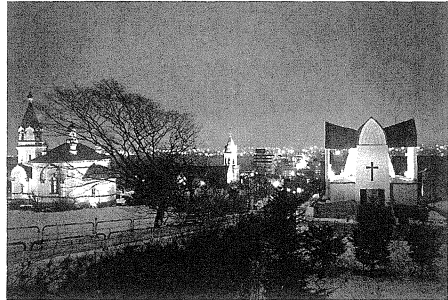
を経て、椎葉とよばれる地に入ったとされています。大八郎が椎の葉を以て陣屋を設け、追討の拠点にしたことから「椎葉」の名が生まれたとされます。伝建地区のある十根川集落にはこの最初の陣屋が存在したとの言い伝えや、十根川神社境内にある杉の巨木（八村杉）昭和一〇年国指定天然記念物）は、この時に大八郎によって植えられたとの言い伝えもあります。

人々の暮らしと祈り

山に囲まれ、山とともに生き、森の恵みを

意欲を根底から変えたのです。それは観光客、特に首都圏の観光客が博覧会のパビリオンよりも古い町並みに関心を寄せたからです。本州各地では高度経済成長に伴い環境が激変し、函館の旧市街の風情は希少なものになっていました。皮肉にも、高度経済成長から取り残された函館には、多くの伝統的建造物が残っており、それが観光客を感動させたのです。やがて函館市には「歴史的景観条例」が制定され、伝統的建造物群保存地区の指定がなされ、伝統的建造物群保存会も生まれました。

例えば函館の顔といわれる国指定重要文化財である函館ハリストス正教会は、数度の火災、日露戦争を経て、本国ロシアで宗教そのものが消えた七〇年を耐えて維持されてきました。幕末の開港以来、教会と寺院が混在し、異国情緒と呼ばれるに至った景観形成の土台は、このような歴史によるもので、これは欧州の教会だけでも、日本の寺社だけでも醸し出すことのできないものです。



元町教会群

今後とも伝統的建造物群保存会の一人として、建物の保存運動に止まらず、前向きな活動を数多く手掛けていきたいと思っています。

（伝統的建造物群保存会役員 若山 直）

「函館をどのシーズンに訪ねたら良いか」と聞かれますが、私は迷わず「冬が最高」と答えます。欧州やアメリカの冬と違い、緯度の関係から白い雪と明るい青空、海の緑が映える冬景色はまれな光景です。「冬にこれだけ色彩豊かな景色は地球上どこにもない」のです。さらにクリスマスファンタジーと伝統的建造物群。動と静の調和。これは今後の観光の在り方を指し示すものです。街路樹のイルミネーションは二月末まで続き冬の町並みをあたたかく包みます。

より、今後この傾向はさらに進むと思われるかもしれません。現在、伝統的建造物群保存地区では街路灯が整備され、建造物のライトアップも進んでいます。「世界三大夜景」の一つとされる函館夜景は山上からの眺めですが、歩いて観光する人が増えています。伝建地区周辺ではシーズンを開かず、早朝多くの高齢者がウォーキングを楽しんでいますし、夜は若い観光客が絶え間なく散策するようになりました。

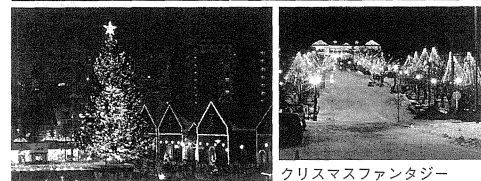
伝建地区には悩みもあります。過疎化により空き家が増加し、不審火が増えたことです。私が経営するレストラン五島軒 金成元年、国登録有形文化財指定）は、四年前隣家からの火災で焼失。これを機会に調査が行われた結果、伝建地区周辺に二〇〇軒もの空き家があることが判明しました。老人所帯は不測の事態に対応しにくいだけに、人的ネットワークを官民一体でつくり上げる必要があります。

函館の 「伝建地区」の冬景色

毎年、函館のクリスマス時期には、姉妹都市であるカナダ・ハリファックス市から、一八mの巨大モミの木が輸送され、クリスマスツリーとして飾られます。海上の船にそびえるツリーにイルミネーションが点灯されると、いよ

いよクリスマスシーズンの始まりです。それとともに、伝統的建造物が建ち並ぶ坂道の街路樹もイルミネーションで飾られ、冬の函館の夜を美しく彩ります。

十二月一日の開会式から二五日の開幕まで、



クリスマスファンタジー

市民は毎日さまざまな趣向をこらして「クリスマスファンタジー」を楽しめます。その日は「市民コーラス」が登場する日に当たっていました。夕日が落ち、ツリーに灯がともり、暗い海面が七色の光で虹色に染まると、モミの木をバックに、赤い衣装のサンタクロース一三名（平均年齢六五歳）が舞台上に登場し、歌い始めました。実は私もサンタの一人でした。雪まじりの冷たい海風のなか、声を張り

上げ、背中に汗をにじませながら観客の拍手を受けました。冬の観光客はこの数年連続して増加しており、台湾やシンガポールなど、雪のない

国々からの観光客も増えています。

かつて、青函博覧会（一九八八年）が開催されるまでの長い間、函館は漁業と造船、連絡船の町でした。しかし、二〇〇海里規制による北洋漁業の衰退、韓国造船業の台頭による函館ドックの斜陽化、そして航空機と鉄道の逆転で、北海道の玄関口としての地位は札幌に移っていきます。青函トンネル開通による青函局の廃止は、函館の状況そのものでした。函館は新たな生き残りの道を模索しなければならなくなったのです。その道の一つが観光で、事実、青函博覧会前後の観光への投資は、その後の函館を大きく変えました。博覧会自体は成功した催事ではなかったけれど、この期間に訪れた観光客の感想が、函館市民の



サンタクロースのコーラス



昔ながらの花嫁行列

緑濃い生垣の直線が続いているのが目を引き
ます。サワラヒバの生垣は道路や隣りの屋敷
との境界を意味したり、屋敷地内部の仕切り
とされたり、さまざまに活用されています。高
さはほぼ目の高さで、屋敷地内が見えるか見
えないかの高さです。「生垣の向こうに見える
武家屋敷の大屋根」が当時の町並み伝える
ものとして特に興味を引く部分だと思います。
塀としての役割をもつ生垣ですが、完全閉鎖
的でないところがこの地区の特徴だと言われ
ます。サワラヒバは四季を通じて濃緑色を保
っており、ヒバの葉を摘んで手で揉むと青くさ
やかな香りがします。

夏、お盆近くになると、地区内のあちこち

岩手県金ヶ崎町

歴史

藩境の緑ゆたかな要害

岩手県金ヶ崎町は、県内陸部に位置し、東
は北上高地、西に奥羽山脈を望み、西の端沿
いに雄大な北上川が流れています。人口は一
万六〇〇〇人、おもな産業は農業で、近年工
業団地を核とした工業も発展しています。

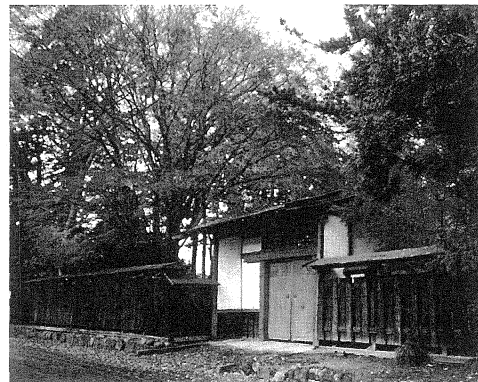
この地区は、近世においては伊達領上胆沢
郡西根村と呼ばれました。伊達氏は領内に二
一の要害を置き、大身家臣に統治させました
が、その一つである金ヶ崎要害は北上川と胆
沢川の交わる合流地点に形成された舌上台地
の上にあり、その自然の地形をそのまま利用
したものでした。

金ヶ崎町の骨格は、寛永二十一年（一六四四
年）に県内藤沢より移封された大町定頼によ
り整備されたと言われており、この大町家が
明治二年の版籍奉還まで約二一五年前この地
方の治世と城下町の整備に努めたと伝えられ
ています。

保存地区は東西六九〇m、南北九八〇m、

面積約三四・八haの範囲で、北上川に沿って
要害があったとされる場所を取り囲むように
武家地、南北に走る旧奥州街道沿いに足軽屋
敷、中央部に町人地が形成されています。

武家地内には七つの小路があり、その小路



大樹に映える四脚門



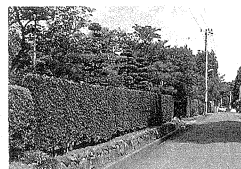
小学生に生垣のヒバ刈り体験
ヒバ刈りワークショップ



ヒバの生垣越しに大屋根を見る



地域との交流の場、来訪者への案
内所 白糸まちなみ交流館



小路沿いのサワラヒバの生垣

で、「チャキチャキ」と剪定鋏で生垣のヒバ刈
りを行う光景がみられます。自分でやる方、職
人さんを頼む方さまざまですが、最近では電
気バリカンで一気刈り込んでしまうという方
も多くなりました。伝統的な手法ではないで
すが、生垣として四角く刈り込むためには電
気バリカンも理にかなっているのでしょう。こ
のような生垣は、家により刈り込み方に違い
があるため、高さや幅などそれぞれに個性が見
られます。

また、屋敷地にはエグネと呼ばれる杉の屋
敷林が残っています。これは、北国という地
域柄、防風のためという意味がありますが、建
物を建替える時の木材としても活用されてき
ました。樺やみじの大樹もみられ、この町の
キャッチフレーズ「藩境の緑ゆたかな要害」の
イメージそのものです。

白糸まちなみ交流館

平成一三年に重要伝統的建造物群保存地区
に選定されたのを機に、行政により地区内に

はほぼ江戸時代のままで、鉤型や枳形、弓型
など、城下町の都市計画に必要とされた町並
みがそのまま残されています。「旧船戸小路」
は、北上川を舟で物資を運搬した際に使われ
た船着場への小路と伝えられており、当時の
物資の流通の面影を見ることが出来ます。

住民の誇り

保存地区の「町並み」を現在まで守ってきた
のは大町家臣団の子孫である当地区住民の
方々といえます。祖先の残してくれた財産を
愛着と誇りをもって保存維持してきたのです。
保存地区内には二つの自治会組織があり、
この意志を後世に伝えたいと地区住民が調査、
記録編纂した記録集を作成してきました。そ
の成果として諏訪小路自治会により「諏訪小
路―その今と昔―」を昭和五九年に、城内自
治会により「城内史」を昭和六〇年に発行し
てきました。その住民発意の歴史編纂など地
域の歴史を重んじる活動を町は評価し、平成
三年度に「城下町金ヶ崎町並み調査」を、平成
五年度に「城内地区等庭園樹木調査」を実施
しました。平成三年度の調査がきっかけとな
り伝統的建造物群保存へと道筋ができ、この
後、保存への活動が活発化し平成一三年六月
―五日「金ヶ崎町城内諏訪小路重要伝統的建
造物群保存地区」の選定へといたったのです。
緑ゆたかな

保存地区を歩くと道路沿いにサワラヒバの

「地域の交流の場、来訪者への案内所」として
「白糸まちなみ交流館」を開館しました。地区
内には伝建にかかわる三つのボランティア団体
の組織があり、交流館を起点にガイドや催し
などの活動を活発に行っています。催しでは
三年前から昔ながらの「花嫁行列」をすべて
参加者の手づくり持ちよりで八月末に実施し
ています。

交流館内には小正月の時期に当地域で行わ
れてきた「みずき団子飾り」が飾られ、三月
には「雛祭り」、七月には「七夕飾り」等の展
示もボランティアの方々の手によって行われ
ています。歴史的町並みの保存とともに地域の
風習も伝えていくということも活動の中で行
っていたいっています。

今年には選定五周年を迎えます。町並みを守
るということはこれからが大事だと思います。

この町並みを見守って応援していただく方々
がさらに増えることを願います。

(金ヶ崎町中央生涯教育センター 菊地重治)



白壁通り (明治期の白壁土蔵造りが建ち並ぶ) の町並み

並み保存地区とその周辺住民で構成され、年費一〇〇〇円で活動しています。本会発足時で重伝建選定前のころは吉井の町並みを活かして活気づけようという機運がとて高まっていた。ところが近年では、町並みにある商店街に空き店舗が増え、各種イベントも来訪客が伸び悩むなど、町並み全体に沈滞ムードがはじめています。本会では町並み保存の先進地や活気あふれる地方商店街を視察し、まちづくりの気持ちを毎年新たにしています。

吉井の町並みも全国の地方の町並みと同様、急速に高齢化しており、若者の都市への流出も著しくなっています。その理由として若者の町並みへの理解、郷土に対する関心の低さ、その一つであると考え、郷土吉井を誇りに思う小中学生の子どもたちを育てたいと考

えました。そこで生まれたのが「町並み絵画コンクール」です。作品応募前の夏休みには町並みの中でスケッチする子どもたちの姿をたびたび見かけます。優秀作品の表彰後、一月には伝建地区の商店街のご協力により、店先に約九〇〇点もの作品を展示し、町並みににぎわいを創り出しています。

木造建築の密集地区である吉井の町並みに安心して住み続けていくためには防災についても考えていかなければなりません。数年前には町並み保存地区内に全焼してしまう火事がありました。一月二六日の文化財防火デー前後には、本会主催による町並み防火訓練を行っており、消防署、地元消防団、行政と協



骨董店の建ち並ぶ「蔵しっく通り」で開かれるお宝市 (5月、9月、11月の年3回)

力して通報、初期消火訓練を行っています。また、昨年度より町並みの防災事業が始まっており、防火水槽、消火栓の設置が進められ、官民一体となった防災のまちづくりにも取り組んでいます。

町並み保存地区内では、町並み保存の根幹である町並みの修理修景への関心が年々高まっています。文化庁伝建修理事業、街なみ環境整備事業による修理修景の申請が毎年十数件、特に平成一七年度は二〇件ありました。このほか、街灯、看板などの整備、道路のカラー舗装化なども進められ、来年度からは電線の地中化事業も始まり、町並みが見違えるよう美しくなっています。

吉井町は平成一七年三月、隣の浮羽町と合併し、うきは市として新しく生まれ変わりました。今後、吉井町町並みをよくする会では、うきは市全体の大きなまちづくりのなかの中で町並み保存に対する住民の意識向上を図り、住みやすいまちづくりを推進していきます。また、今年度からは新たに「町並み基金」を創設し、毎年の繰越金をストックし、これまでに以上にさまざまなまちづくり事業が実施できるようにしました。今後より一層さまざまな活動に取り組んでいきたいと考えています。

さいごに、九州にお越しの際はぜひ、白壁と清流の美しい吉井の町並みにお立ち寄り下さい。(吉井町町並みをよくする会会長 石井信義)

福岡県うきは市吉井

忘れられていた遺産を まちづくりの舞台に

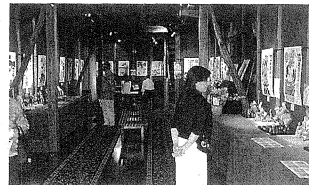
繁栄と大火から生まれた白壁の町並み

うきは市筑後吉井は福岡県南東部に位置し、福岡市から高速道路を利用して約五〇分と交通の便も良好な場所に位置しています。

町並みの成立は近世に遡り、江戸時代を通じて、城下町久留米と天領日田を結ぶ豊後街道の宿駅として機能しました。江戸時代中期以降には商品作物の栽培・加工およびその集散や「吉井銀」と呼ばれる独自の金融活動により、飛躍的な発展を遂げました。また、江戸から明治期にかけて三度の大火にみまわれた経験から、吉井の人々は家を燃えにくい土蔵造りにしました。そうしてで上がった町並みは彼らの富を象徴する居城が建ち並ぶものでした。

民と官が協力して取り組んできた 吉井のまちづくり

吉井町における町並み保存の取組は、昭和



小さな美術館めぐりで土蔵をギャラリーに (5月3日～5日)

五九年に「白壁保存と活性化を考える会」が発足し、これが建築士会との共催で「吉井の町づくりシンポジウム」を開催したことに始まります。しかし、この後すぐには、住民の町並み保存に対する意識は高まらず、約七年が過ぎました。ところが、平成三年の一七、一九号台風によって町並みは大きな被害を受け、痛々しい家屋が何件も見られるようになり、これが住民の保存意識向上の一つのきっかけとなりました。また、平成四年、「全国町並みゼミ」を吉井に誘致したことで全国からやってきたゼミ参加者に吉井の町並みを評価していただいたことにより、地元町並み保存に対する意識が大きく変

わり始めました。平成五年からは吉井町単独事業による伝統的建造物の修理が始まり、目に見えて少しずつ町並みが美しくなりました。ソフト面では、町並みが整備され始めたのと同時に民間主導のイベントもいくつか生まれました。各家の押入れや蔵に眠っていたおひなさまを展示した「おひなさまめぐり」、店先やお寺などが一斉にギャラリーに変わる「小さな美術館めぐり」、吉井の骨董店をはじめ九州一円の骨董商が集まる「お宝の市」、土蔵造りの建ち並ぶ白壁通りを中心に町並みの軒先に市が立ち、通りを中心に音楽、踊りを楽しむ「吉井しらかべ楽市楽座」などが行われ、開催中は町並みがひとときわかにぎやかになります。

住みやすく、活気あふれる吉井を次世代へ

吉井の町並みを快適で潤いのあるまちにするべく、「吉井町町並みをよくする会」が発足してから一〇年以上が経過しました。本会は町



楽市楽座では軒先市のほか吹奏楽のマーチングなどもある (毎年11月第2土日)



町並みの店先に絵画を展示